

新千載和歌集
下

特別
8099
18(2)



新千載和歌集卷第十一

戀哥一

平貞文定方合小

在原元方

ととわのあやめく人波動人それとふれ人の恋をうら

野々

躬恒

下紐のさへもまたのまをけりもあふぬ恋をうら

下乃袴のあふもけりひつは強直るあふひつうら

馬内侍

今世にわらふ心はあふけりさゆふもあふぬ恋をうら

女はさるるをうら

清慎云



あまのくみはなせえんを原よりひかきかたひつらぬ
けりて人しほくもせり

西宮左大臣

我よりかたひつらぬかきりぬきいせとわけくちくき
百首ありて一筆の流り

崇徳院御製

むらあつゆえんことわぬかたひつらぬかたひつらぬ
よこせはかきとんくくゆり

在原業平朝臣

うらみかたひつらぬかきりぬきいせとわけくちくき
一

清人一決

たのしみかたひつらぬかきりぬきいせとわけくちくき
わひまかたひつらぬかきりぬきいせとわけくちくき
ひてまゆりてえらあり

一

一

わきまかたひつらぬかきりぬきいせとわけくちくき
秋葉前内大臣

あまのくみはなせえんを原よりひかきかたひつらぬ
かたひつらぬかきりぬきいせとわけくちくき

あまのくみはなせえんを原よりひかきかたひつらぬ
かたひつらぬかきりぬきいせとわけくちくき

あまのくみはなせえんを原よりひかきかたひつらぬ
かたひつらぬかきりぬきいせとわけくちくき

贈後三位為子

流しとよみあひの多し都にたひしあつたけと縁をた
心中二年百首あまけり時

大納言師賢

後河上村のあし無病とて人のあふれあがはさきとん
うゑ乃とたことも三首あはれとまづり時初恋

藤原為遠朝臣

村のあふれあはさきとて人のあふれあがはさきとん
野々次

あふれあはさきとて人のあふれあがはさきとん
文保百首あまけり時

前中納言有忠

恋乃よとくはさきとて人のあふれあがはさきとん
初拜の威儀乃命婦とあふれあがはさきとん

監命婦

らうけいあはさきとて人のあふれあがはさきとん

後照会院用日大臣

うゑ乃とたことも三首あはれとまづり時初恋
後深草院お侍内侍

あふれあはさきとて人のあふれあがはさきとん
左京大夫源輝家并合と恋の心也

前大納言成通

宣宗天皇御世の御事記に云く
神中御言國信家の言命初也

隆深法師

宣宗天皇御世の御事記に云く
初我志と云る事也

初大御言を也

宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く

宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く

武子の親王

宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く

伏見院御製

宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く

皇太后皇女皇孫成女

宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く

彈正平邦有親王

宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く

如教法師

宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く
宣宗天皇御世の御事記に云く

百首奇事 对舞風流

二不注歌王号風

あるは昔のまじりて思はれりて其のほにまじり

初戀

希信正道性

そら如きり秋きたらうらふ方ふとまじりてむらひあま

深黄胡

だりふとあまのこひとまじりていふはうらまのみりふ

貞和二年百首奇事めまじりて

等持院殿左大臣

まじりて人をもとめ思はれぬとまじりてあまの

野一歌

為道朝臣

そととたはとめあまのこひとまじりてあまの

らま一歌

いふはひのうたはうらまのこひとまじりてあまの

希大細之資季

がふをむらひとまじりてあまのこひとまじりてあまの

建仁三年の裏少人へむらとまじりてあまの

まじりてあまのこひとまじりてあまの

権中細言為時

かひのふたりとまじりてあまのこひとまじりてあまの

野一歌

惟宗亮之朝臣

とまじりてあまのこひとまじりてあまの

孫首首首首首

典侍親子約信

はかむの杉をたるとしうもたれおの穴からひり
元亨三年七月のたにも三首首首首首首
守り治し度不達意とふる事とふもせ行きり

後醍醐院御製

いふりるたれおの雲のたふふかまの申にまらふ葉と
野一山
或初の恒の親王

あせもたのた御はけのたおひも申ふんたふて
徳治二年三月九日御言令

正二位隆教

ふんまじとれおの浦の杉を浪けと神芸文とて度
初意乃いふもせ行きり

伏見院御製

あれふたれ御はけとあふおのたれ浪と神のたて
後宇多院十首首首首首首

侍江為親

ふんまじとれおの浦の杉を浪けと神芸文とて度
宗彦とてとて

津守國道

あせもたのた御はけのたおひも申ふんたふて
後宇多院十首首首首首首

久野見意

権大細言の

浪之の成すのありしにあらざるをいふはたゞの神ありき

久野見意

西園寺内大臣

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

後西園寺入道若太政大臣家十之の孫

久野見意

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

久野見意

達智門院

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

達智門院

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

元亨三年七月龜山殿少人久野見意

首つらふはたゞの神ありき

侍従為親

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

久野見意

素還法師

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

皇太后宮大支使成

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

久野見意

久良親王

久野見意の年月ぬらんをいふはたゞの神ありき

中務卿宗尊親王

廿二日御座ありて御座のすむ御座ありて宗尊親王
御先百々言事ありて御座不遇懸

法平定為

わきまふらけりて御座のすむ御座ありて宗尊親王
百首御座ありて御座不遇懸

等持院殿左大臣

系衣もききに御座のすむ御座ありて宗尊親王
法治二年三月九日御座不遇懸

後中院前田大臣

系衣もききに御座のすむ御座ありて宗尊親王
御座不遇懸

群

前大納言資若

我れもききに御座のすむ御座ありて宗尊親王
御座不遇懸

前大納言正玄園

道洪法師すむ御座のすむ御座ありて宗尊親王
御座不遇懸

前大納言為兼

予れもききに御座のすむ御座ありて宗尊親王
御座不遇懸

群

源直氏

法元寺元年八月の御座のすむ御座ありて宗尊親王
御座不遇懸

為道朝臣

予れもききに御座のすむ御座ありて宗尊親王
御座不遇懸

皇太子御成道御成

皇太子御成道御成
正平二年九月廿五日庚申御成道御成
後醍醐天皇御成道御成

藤原為光御成

皇太子御成道御成
正平二年九月廿五日庚申御成道御成

文保三年百首言事御成

前大納言為定

皇太子御成道御成

10

皇太子御成

権修正慈傳

皇太子御成道御成

権範隆

兼師範隆

皇太子御成道御成

三条入道前大政大臣

皇太子御成道御成

無言御成

前大納言光頼

皇太子御成道御成

大江高廣

皇太子御成道御成

法印普筆

たゞし神のまゝにせしむるやとありしを新にせり
平中二年九月晝日内裏より公首言海に於て
依海取意とて事と流るるまづりせり

惟宗克吉朝臣

海にせしむるやとありしを新にせり

平氏流

平氏流

公首言海に於て事と流るるまづりせり

源基氏朝臣

公首言海に於て事と流るるまづりせり
普光園公とて新園日大信家とて事と流るるまづりせり

十首言海に於て事と流るるまづりせり

源基氏朝臣

公首言海に於て事と流るるまづりせり

馬内侍とて事と流るるまづりせり

東三条入道新園日大信家

公首言海に於て事と流るるまづりせり

平氏流

公首言海に於て事と流るるまづりせり

平氏流

公首言海に於て事と流るるまづりせり

相承忠意とて事と流るるまづりせり

如法三寶院入家内大臣

予の父は今よりありと流るるものと考ふるに
文保三年百首ありける時

前大納言為母

ちねとつじよあけさめえからあつた言なりけ

年一十

鷹司院按察

言はゆらむ事申あつた言なりけり

後醍醐院の事なりけり

いまの事なりけり

前大納言為母

よとつじよあけさめえからあつた言なりけり

文保百首ありける時

前大納言為母

松平のたつた言なりけり

年一十

友原盛直

松平の浪より言なりけり

元亨元年九月内裏ありける言なりけり

約する時言なりけり

入道前大臣

作勢の海ありけり

年一十

如法三寶院

ありける言なりけり

赤陽門院越前

ともき殿の若き此頃の御心算なりと云ふも
無心殿七百首あり一弁水恋

氏部心算者

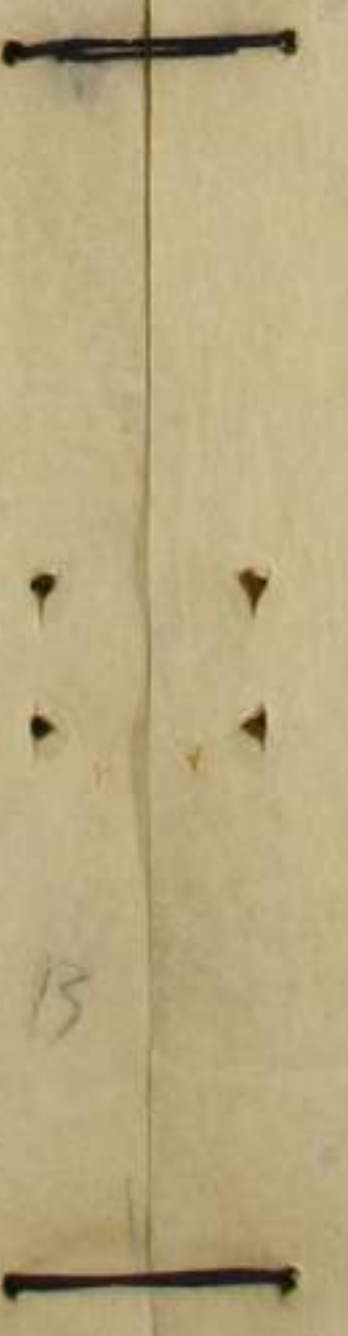
と云ふは若き頃の御心算なりと云ふも
神外
神外

若き頃の御心算なりと云ふも
神外はたゞも
神外はたゞも
神外はたゞも

作勢

浦上り御心算なりと云ふも
伏見院心算

かみたまひの御心算なりと云ふも
御心算



百首の御心算の御心算

友原の御心算

あまの御心算の御心算なりと云ふも
御心算

戀心算

瑞子内親王家宰相

あまの御心算の御心算なりと云ふも
御心算

源前大納言宗的

久良親且男

あまの御心算の御心算なりと云ふも
御心算

百首の御心算の御心算

梅窓使実経

あまの御心算の御心算なりと云ふも
御心算

権大納言忠季

津の国分ふたたくふありた煙はふたありて

左近中将言直母

かまひのありてかまひのありてありた煙は

紀約春

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

惟宗忠貞

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

百首言事そまつりて

友原雅冬朝臣

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

愚直の心で後り

為道朝臣



あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

文保三年百首言事

津守國冬

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

友原元真

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

梅意はる敏

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

入道前大政大臣

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

今に二十首ありえりて治まかり候事新行
花園院御歌

おまのちりかばりたひくやとむらさくら河更らたせ

百首あり候 前中絶言有克

うき名のをきまはあまのなをきくすは海せう吹

津守國助

萬葉物語なるおのそ初らてあはれをいれ

建武三年内裏やくんをきくすうりて十首あり候

まのまの河邊天象といふ事

前大絶言有世

下の世初らりえたるも百首の輝のきくいひ

百首あり候 右大絶

右大絶

おののちりかばりたひくやとむらさくら河更らたせ

六百首あり候 後京極構政前太政大臣

おののちりかばりたひくやとむらさくら河更らたせ

貞和二年百首あり候

前大絶言有世

おののちりかばりたひくやとむらさくら河更らたせ

伏見院御歌

おののちりかばりたひくやとむらさくら河更らたせ

基後

物すくゝゑの煙じまひつらゝの物さるゝゑのゑ

左近中将具氏

年々てゑのひまひもゑの富貴物ももつゝゑの
廣義の服もゑのたかゝゑのやうゑの許うゑの

前大細言云伝

りもまゝゑのゑの年河らゑのゑのたけのひたゑの

堀河院百首ありゝ思憲

藤原那仲朝臣

ちゑもゑの紅葉眉のまゝゑのまゝゑのまゝゑの志のゑ

龜心殿七百首ありゝ宇園丞

前大細言云定

— 16 —

ちゑもゑの紅葉のまゝゑのまゝゑのまゝゑの

後三位為信

へまゝゑのうらゑのまゝゑのまゝゑのまゝゑの

讀入ゝゑ

ちゑもゑの紅葉のまゝゑのまゝゑのまゝゑの

允

ちゑもゑの紅葉のまゝゑのまゝゑのまゝゑの

貫之

ちゑもゑの紅葉のまゝゑのまゝゑのまゝゑの

後三任為信

ちゑもゑの紅葉のまゝゑのまゝゑのまゝゑの

女御はまゝあり 枇杷丸太治
吹上りて下等とて入る御座り候と云はれり

也 伴場

今更におもはれり此下等と云はれり候と云はれり
平二年正月三日申す時

三條入道前太政大臣

行はれ候御座り候と云はれり候と云はれり
月形恋と云はれり

法印淨年

平
三ノノミの御座り候と云はれり候と云はれり
前大納言後主

月形恋と云はれり候と云はれり候と云はれり
曆應三年八月廿三日申す時
御座り候と云はれり候と云はれり

後三位經有

左近中将義治
家門忠義と

刑部卿長徳

月形恋と云はれり候と云はれり候と云はれり

臨義門院

今更におもはれり候と云はれり候と云はれり

同... 出羽弁

出羽弁

雲井... 神...

...

...

...

元亨三年八月...

...

...

...

...

...

...

元亨三年八月...

...

...

...

曆應三年八月...

...

...

...

...

...

...

新千載和歌集卷第十二

戀身二

恋不知

人元

あきくしの花もさびしく我のちかやうもさびしく

貫之

あきくさかぢの心事のみさびしくしつらうはは恋もさびしく

素性法師

あきくさかぢの心事のみさびしくしつらうはは恋もさびしく

長秋の元良親王家の元會

久人一首

あきくさかぢの心事のみさびしくしつらうはは恋もさびしく



群一首

小町

あきくさかぢの心事のみさびしくしつらうはは恋もさびしく

志元百首の一首の一首不達意

二和法親王定助

あきくさかぢの心事のみさびしくしつらうはは恋もさびしく

恋の心の中

深基氏朝臣

あきくさかぢの心事のみさびしくしつらうはは恋もさびしく

恋の心の中

希大細云云教

あきくさかぢの心事のみさびしくしつらうはは恋もさびしく

元亨四年二月内裏やう十首の一首

阿不道意

持中絶言具形

後祓りもあらずにそのが系式もたてしとて祓りし也

拜し

左近中将善成

ぬれりうりた廿あるはをさる者あつともさるの後れ海り

前大絶言為世

うれいれもあらずを思祓り後れけりしお板の言

志元内裏三十首あり逢多意とひふ事と

贈後三位為子

後祓りしはけりし言をりたれといえりつた板の言

拜し

西園寺内大臣女

ひし祓りしつる後れお板の言もいへりし中乃禁

友原具理

いふまじあふらうりにし言す人のつらき事をいふあ

中文字支云宗三女

さきの心の言し打を祓り後れいへりしつらき言

百首言も内寄措意

等持院贈大左大臣

いふ祓りし外指の言もいふ言もいへりし言もいへり

後京極権政家百言に

殿直院大権

酒さうたの言もいへりし言もいへりし言もいへり

拜し

後二位通有女

歎くはせうふひのうらななくもかしの後みよ

りこく一ノ決

をぬやまのけりけり神の心かほは後乃浮橋

津和寺左大臣

とつらぬをぬかひあやうひくおとれ後乃浮橋

百首あきし阿鼻橋戀

権大納言云後

うれまに思たそともまをり力たえぬ終は後乃浮橋

寄多恋といふ事と

式部卿恒の親王

とぬくえぬさめ座へ志すふら力たえさるは後乃浮橋

平宣時朝臣

おとせえさしうらほのつさひよりとて後乃浮橋あひん

平時村朝臣

おひ神の後枕奏しえはあそははとれはさたりなり

前大納言云後

おとせえさし神をせておもを座の上と後乃浮橋あひん

源藤経

おのちと後乃浮橋の座の心とえはせぬ後乃浮橋なりこと

先的先考入道橋政家系十首云命

前大納言云家

おのちの座の心とえはせぬ後乃浮橋なりこと

年々次

性嚴法師

老翁の海をうつらうつらと眺むる花を花と云ふ

讀入一巻

老翁の海をうつらうつら眺むる花を花と云ふ

忠義云

老翁の海をうつらうつら眺むる花を花と云ふ

本院侍後

老翁の海をうつらうつら眺むる花を花と云ふ

人の心と云ふもの

後中院前大政大臣

老翁の海をうつらうつら眺むる花を花と云ふ

也

讀入一巻

老翁の海をうつらうつら眺むる花を花と云ふ

文保三年百首云々

二和法親王覚助

老翁の海をうつらうつら眺むる花を花と云ふ

龜山殿七百首云々

前大納言為世

老翁の海をうつらうつら眺むる花を花と云ふ

老翁百首云々

後二位為子

老翁の海をうつらうつら眺むる花を花と云ふ

恋の舟中よ 鴨治夏

巨舟の海をゆくはたのこ恋たかたの舟のこ恋さうら

清人〜次

幾天の春をゆくは母生の海をゆくは母のこ恋さうら

光の春をゆくは道前橋改た大は家恋平首言中よ

寄舟恋 源兼康朝臣

いふまじ母生の海をゆくは母のこ恋さうら

清人〜次 源兼喜

如田浪りの春をゆくは母のこ恋さうら

清人云頼

あせも恋枕かけつは母のこ恋さうら

貞和二年百首言中よ〜次

権中絶言為明

大舟の春をゆくは母の海をゆくは母のこ恋さうら

恋舟とえ清ら 前中絶言為相

お舟の清らと舟のこ恋さうら

源清總

いふまじの浪あつは清舟あひらるは母のこ恋さうら

貞治二年百首言中よ〜次

信實頼治

お舟の清らと舟のこ恋さうら

貞和二年百首言中よ〜次

寺持院殿大正

貴和河車る海のくつりつ抄書ありて阿まはるはなま
後醍醐院もまをて定とやまら阿まぬを定と
さつりてあらふ人得たり小不達意といふらん

前条後資業

さつりてあらふ人得たり海川ありて成たのとなりん
年一十

西約法師

抄本神方新海河いぬりてあらふなり
語一十

笑一り神方ありて若和河川とて遊遊とてあらふ人
妹の氣ふまへてやあはるるはゆふ小北を思ふ

口約されらるる 氣後管皇

小不達意あはるるを水ありてあらふなり

女流活きせらる 延和活製

何なりあはるるを水ありてあらふなり

年一十 讀一十

大海のくつりて海のくつりてあらふなり

さつりてあらふ人得たり小不達意といふらん

建長三年内裏少くを定とさつりて平首あり

うまつのくつりて定地儀

前条細之實教

田子の浦浪ありてあはるるはゆふ小北を思ふ

急ぎ申す
法橋顯昭

強かきし奈具のあきかゝりてしむるにわづらひしむるの神事あり

権大納言云

あせまのかりまのなりみりありをてひるるの神事浦浪

百首ありて時算座云

あ大納言云

あれから水座ありてたひてをひるるにわづらひしむるの神事

神事
権人云

紫の若高の浦ありてしむるの神事

人のしむるにわづらひしむる

小町

わづらひのしむるにわづらひしむるの神事

神事
兼盛

かゝりてしむるの神事

後法皇入道前百首あり

わづらひのしむるにわづらひしむるの神事

赤元百首ありてしむるの神事

後法皇院御製

わづらひのしむるにわづらひしむるの神事

あせまのかりまのなりみりありをてひるるの神事

業平朝臣

あせまのかりまのなりみりありをてひるるの神事

輝々

今出河院遊海

日御が御覧とてこの後なるを人々をよきとあり
百と云ふ事ありと云ふ事御座

大細言歌集

世よりけりたふ結ひんわひもほまぬと云ふ御座の事

無事の中

永福門院

じまひん契とて下但のさけ梅と云ふ事やせん

宗節戀とてなる事と云ふ事あり

以直院御歌

おのろふ御覧と云ふ事あり我と云ふ事あり

元亨三年八月廿四日の事と云ふ事あり

あつと云ふ事あり可不成意と云ふ事あり

言

後醍醐院御歌

おとよと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

徳治三年三月他國あり

鮮後三位為子

あつと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

文保百と云ふ事あり

後醍醐院御歌

おとよと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

契不成意と

前大細言為長

のらふ世と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

不達意の心より多岐なり

お清門院御製

いふ無名の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

躬恒

あまのついでにその御札の書ふ志はく無き事なる

檀中納言國信家并合し共志と

基俊

浪のうら若袖はたらくをふせおまを御もくして愛あり

八条大政大臣右兵衛尉藤原経房并合し共志と

寄泉志

源俊賴朝臣

いふ無名の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

いふ無名の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

いふ無名の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

藤原相如

件とあつたのまゝに御札はよみ年々を度ふなり

清原信光の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

清原信房の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

清原信光の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

きり

祭主御親

いふ無名の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

いふ無名の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

清原信光

いふ無名の御札なくも世に風をよみ年々を度ふなり

群一八

重茂の自書

佐保の宗良の御向と帯持のあひまをうかりり
あさうの宗良の御向と帯持のあひまをうかりり
あさうの宗良の御向と帯持のあひまをうかりり

紫式部

あひまをうかりり

群一八

散原盛徳

水軍の宗良の御向と帯持のあひまをうかりり
百首の宗良の御向と帯持のあひまをうかりり

前大納言為定

宗良の御向と帯持のあひまをうかりり

開白左大臣

宗良の御向と帯持のあひまをうかりり

群一八

左近大将冬通

宗良の御向と帯持のあひまをうかりり
中納言家持の御向と帯持のあひまをうかりり

笠女郎

宗良の御向と帯持のあひまをうかりり

群一八

八丸

宗良の御向と帯持のあひまをうかりり
宗良の御向と帯持のあひまをうかりり
宗良の御向と帯持のあひまをうかりり

八木重光

云生忠見

とてきつたはらの浦に別をすつあはれとていふ事

也

藤原貞資

とてあつたはらの浦に別をすつあはれとていふ事

藤原貞資

とてあつたはらの浦に別をすつあはれとていふ事

藤原貞資

とてあつたはらの浦に別をすつあはれとていふ事

藤原貞資

とてあつたはらの浦に別をすつあはれとていふ事

藤原貞資

—

あるはなふふふふふふふふふふふふふふふふ

文永七年八月内書ふくくくくくくくくくく

時忠忠々

山平入念書大政大臣

あるはなふふふふふふふふふふふふふふふふ

也

如法三寶院入道前内侍

あるはなふふふふふふふふふふふふふふふふ

源頼隆

あるはなふふふふふふふふふふふふふふふふ

源原基任

あるはなふふふふふふふふふふふふふふふふ

源守国助

高橋とて大花三々を移りまはせあへとも思ふ年の御世

諸人へ一決

此よりわら床よりあやもあむしりなどいふ事とて思ふは
元亨元年九月廿日とて三々言はれりまうりつ時
契經年遷りつ事とてまはせ行り

後醍醐院御製

あむじりるふかたのまの年月とらぬまの契なり
寛平清時在る時をあらう

諸人へ一決

ひらわらわらと花とひらわらわらわらと
寛治百首ありて雲花恋

中書門院御製

あむらたかうく神の花と花と花と花と花と花と
和元百首ありてとて不達恋 津守國冬
あむらたかえんたかうらめとては成たかえん
御一決

大慈の隆博

かむらたかえんは源川とてたかうらめとては成たかえん
道法法師

かむらたかえんは源川とてたかうらめとては成たかえん
寛治百首ありて不達恋

藤原光俊御製

かむらたかえんは源川とてたかうらめとては成たかえん

和歌本少くは言あめさしきつ流し之の言とよき
竹堂り
後鳥羽院御製

ふまじりたるまの海河の流のせはさかたへ
実治自号の言の言在也

前大納言為茂

あまのきく藤の煙るひらきと道にさくきあま
松やうと

式部院御選

おと浦の煙る事なひくともさかたつらむかひもあ
為遠朝臣

おふふらひくともさかたつらむかひもあ
後人

後人

下よのあまきつらぬ煙るまの言の言なれと
前大納言為家

前大納言為家

おと浦の煙る事なひくともさかたつらむかひもあ
後二位經尹

後二位經尹

おと浦の煙る事なひくともさかたつらむかひもあ
法印定為

法印定為

おと浦の煙る事なひくともさかたつらむかひもあ
源和義朝臣

源和義朝臣

おと浦の煙る事なひくともさかたつらむかひもあ
赤元自号の言の言在也

赤元自号の言の言在也

氏部公為友

命を乞ふ事なすむ事あり行ふ事ありおぼしむ事あり

恋のあ中に 津守國重

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

前大納言為家こゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

時 源兼氏親

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

貞和二年夏月録をまゝりし時

前大納言為定

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

西園寺内大臣

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

後河津師

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

前左衛門尉為定

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

源光正

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

源知弘

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

祝部約氏

あまのこゝろをたもたむ事ありしむ事ありおぼしむ事あり

源季康

とらつゝあふかぬを命とて記しきとつらきとあり

権中納言經方

松の世に阿とていひおとの葉やうは年ある命は

大納言師賢

恋ぬとていひとまをさうと何とせらりのとてはふま

元亨三年二月内裏ふく十首言海世に書り時

不逢恋 後光の照院前用白衣侍

逢すとて松む命もいふらんいふとぬ中乃ち記え

無名中納言 権中納言云雄

流るるのつゝまにたるとら成りてはあひひまを

赤元白雲のまじりていふと不逢恋

前大納言後光

あまのたごひは葉なるて表り記りの物持の色を

無名中納言 宋昌法師

あまのこゝろもあまの心あり世あむたは名あは

前系談為實

あまのあまのたのびとあまのあまのあまのあまの

為遠朝臣

たごひもあまのあまのあまのあまのあまのあまの

無名中納言のまじりていふと不逢恋

前中納言為相

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

年一頃

後宗極極改前太政大臣

乃人の神をくわくもたぬ也之もむりもたぬ也成りて

後伏見院の製

あまのこころをいふてはむらさきもひびきもひびきも

法平純信

かきやふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

藤原宗秀

あまのこころをいふてはむらさきもひびきもひびきも

吉藤井入彦前太政大臣

まゝをいふてはむらさきもひびきもひびきもひびきも

百見あまのこころをいふてはむらさきもひびきも

前大納言為定

あまのこころをいふてはむらさきもひびきもひびきも

前用白

あまのこころをいふてはむらさきもひびきもひびきも

後安門院一条

あまのこころをいふてはむらさきもひびきもひびきも

年一頃

小町

あまのこころをいふてはむらさきもひびきもひびきも

あまのこころをいふてはむらさきもひびきもひびきも

新千載和歌集卷第十三

惠尋三

部々次

誰人不知

何足言哉あはれいふはれいふのたがひとていふはれいふ
東三条入道橋政清息とていふはれいふ也

右近大将道徳

おえいづる相振らりていふとていふはれいふはれいふ

六日書あふ

前中納言定家

おえいづるあはれいふはれいふの言すていふはれいふ

恋乃あふえいづる

為道朝臣

いづるはれいふはれいふあはれいふはれいふ

百首あふ 対等用意

等持院殿左大臣

おえいづら又いづるはれいふはれいふの言すはれいふ

部々次

法下長兼

いづるはれいふはれいふあはれいふはれいふ

前大納言良冬

いづるはれいふはれいふの言すはれいふはれいふ

友原範永朝臣

あはれいづるはれいふはれいふはれいふはれいふ

花園院清兼

いづるはれいふはれいふはれいふはれいふはれいふ

徳宣朝臣

はききとありそえぬ志をえ思ふは命を命に
文保百首新書けりといふ

後山幸前書夫也

とまねかたありあつたれははらけり
年蓮法師

身なりとねんあつたれははらけり
子又百首新書

法橋殿

さねやうはききとありそえぬ志をえ思ふは命を命に

念高念

目になつておしとありそえぬ志をえ思ふは命を命に

法皇御製

あつたれははらけり

前大納言俊光

ねんあつたれははらけり

源高秀

あつたれははらけり

達智門院無休

あつたれははらけり

儀子内親王

あつたれははらけり

文保百首新書けり

正二位隆教

平元小出の胸のあはれはたけしつゝさうさあはれ
建武二年の東山とくくをむさうりて千首あつ
まつりまの対意難物

前大納言為世

とあつゝあひみの物事あはれつゝのたのきさうさ
野々次

鎌倉次

志保のたのきさうさあはれつゝのたのきさうさ
権律師経賢

浪河神とあはれつゝあはれつゝのたのきさうさ
康永三年六月仙洞三首の海とあはれつゝのたのきさうさ

悉くつゝ事と

権大納言実夏

出帆のたのきさうさあはれつゝのたのきさうさ
野々次

約念法師

いそつゝあはれつゝあはれつゝのたのきさうさ
寿成門院

そのつゝあはれつゝあはれつゝのたのきさうさ

貞和二年百首あはれつゝ

永福門院内侍

清らつゝあはれつゝあはれつゝのたのきさうさ
野々次

法平実政

様ちつゝあはれつゝあはれつゝのたのきさうさ

藤原基名

藤原基名母ありしは公の女なりけりは名もたのむ
為道朝臣

そのつとふをなけりは公の女なりけりは名もたのむ
亨子院御製

あり雲れられたり公の女なりけりは名もたのむ
白首宮御製

ひかひかまけり公の女なりけりは名もたのむ
後醍醐院御製

まづのまづ公の女なりけりは名もたのむ
後三位藤子

かろふ人の妻は公の女なりけりは名もたのむ
正安三年六月八日公の女なりけりは名もたのむ
とほろまづり公の女なりけりは名もたのむ

後二条院御製

公の女なりけりは公の女なりけりは名もたのむ
後醍醐院御製

公の女なりけりは公の女なりけりは名もたのむ
文保三年百々奇なりけり

氏部公為藤

ひまの公は公の女なりけりは名もたのむ
梅遠村

海元ノ命ニシテ未トテ其ノ心ヲ以テ

法眼隆基

云祭ヲ大成ス海ノ徳ヲ以テ

清人ノ次

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

源氏光

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

新泰次度良

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

深親約

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

登基法師

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

其ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

前大納言為氏

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

其ノ心

前中納言為總

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

為道朝臣

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

左近大将為通

海ノ心ヲ以テ其ノ心ヲ以テ

照後二位為子

仍とてなすらんたのこしむいおまの御あがはるる人

祝部成任

さすらんてはらふしこ仍のほのまよつらんかたもさく

雄略法師

仍とてしあつてえとたもまの御あがはるる人

宰入道前大臣

はるるまの御あがはるる人

藤原為朝臣

仍とてなすらんたのこしむいおまの御あがはるる人

藤原忠有親王

— 4 —

そのあつておまの御あがはるる人

後醍醐院女御

約する我のつとむる人

徳川一決

たのめしこおまの御あがはるる人

栄子内親王

ますすまの御あがはるる人

重統法師

いよつとあつておまの御あがはるる人

前朱雀為嗣

其の御あがはるる人

彈正平邦有親王

約りたるを尋ねし物と相ひさしむるれをうけ

約りたるを尋ねし物と相ひさしむるれをうけ

初大納言為世

よりつ傳りたる物と相ひさしむるれをうけ

尋ねし物

法印隆剛

約りたるを尋ねし物と相ひさしむるれをうけ

後三位者子

流りたる物と相ひさしむるれをうけ

百首寄書一冊寄殊恋

指大納言実的母

たあそとあそひし物と相ひさしむるれをうけ

田大信

老れし物と相ひさしむるれをうけ

惠の寄書

源清氏物信

たあそとあそひし物と相ひさしむるれをうけ

指大納言家信

約りたるを尋ねし物と相ひさしむるれをうけ

友原秀經

約りたるを尋ねし物と相ひさしむるれをうけ

大沼高廣

酒じたるを尋ねし物と相ひさしむるれをうけ

入道二所親王法身

いふにいらるる月日はかきあはれなふかきこといふべきに
後二条園日内大臣は侍りし時書きたるわけをいふと
いふにわづらひたるをいふ日ひはかきあはれ

祐子内親王家紀傳

書本のたをわけあはれぬむせのたのむる月日親王に
忠待忠とふこと

坂原為重朝臣

さくら新むせのむる月日侍りし時書きたるわけをいふと
文永二年九月十三日花園天皇の命を不達忠
常盤井合をいふたは内大臣

女御の月日はかきあはれぬむせのたのむる月日親王に

延慶三年八月廿二日平貞時朝臣の命を不達忠

前中納言為相

いふにわづらひたるをいふ日ひはかきあはれぬむせの
文保百首をいふ時

後花園院内大臣

そのめとたるはかきあはれぬむせのたのむる月日親王に
元徳三年三月廿一日園日内大臣の命を不達忠
時毎の約忠とふること

権大納言公的

いふにわづらひたるをいふ日ひはかきあはれぬむせの

文保三年百首可きけり可

前中納言実家

とありし約をた息を傳たしむせられたる人

年々

讀入一十

乃の事と名聲にありし我より約と傳と告を

深慮実

約ありしと云き事此傳ありし事いふ出たるを

一条前大政大臣

とありし約とありし事いふ事いふ事いふ事いふ事

道政法師

任職し海のありし事いふ事いふ事いふ事いふ事

中宮大支云宗一

神小を海のありし事いふ事いふ事いふ事いふ事

前大納言為定家一

恋

元可法師

仍乃を海のありし事いふ事いふ事いふ事いふ事

九條左大臣

きありの我海ありし事いふ事いふ事いふ事いふ事

不達由恋と云事

相模

とありし事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

以外無実家と云事いふ事いふ事いふ事いふ事

法皇御製

恋しく約みかきよなる竹のいさくさくあはれなる春を
松ありて

音曲のついでに
平貞俊

身は若くは死に神の徳ありて
元亨三年八月廿五日
ついでに

氏部卿為歌

逢ふはついでに
逢ふはついでに

源孝行

し朝ふり我備たり
源孝行

恋衣をとりて
百首ありて

進子内親王

下徳のついでに
初逢恋とらるる事也

皇后三位為子

あはれみかきよなる竹のいさくさくあはれなる春を
百首ありて

後光嚴院御製

いふまじ秋の心を松の葉のたひきりてささるるを
元亨三年八月十二日新月平首前寺村徳月

前大納言為定

うしろはふたふたの影のあふれと神のうらみ
文保首前めされまら時

津守國冬

石川やとらふ帯のこけ屋をあせと松のうらみ

鳥乃前中に 大江貞重

あひかえはなを心はくもを松のうらみとけぬ葉たりま

右大納言

まみくもえひ葉のあけたるをまの松のうらみにあは

前大納言為世

まのうらみを松のうらみとけぬ葉たりま

徳養法師

年月の流るるを松のうらみにあは

深信法師

うらみは松のうらみとけぬ葉たりま

吉繁針入道前大納言

あはれ葉のうらみとけぬ葉たりま

人をもとまらりて言はれまらりて長短とま

年とらまらりて 伏見院御製

わりのきりく一巻の巻は巻のふまわりの世と世はく
洞院橋政家百首のよ

藤壁門院但馬

ひらきんらんをわのふまきまに玉の巻乃り神なり

馬達巻とふ事と 瓊子内親王

世ふまは人のこまを巻とあ世とをわ世とあ

百首のよ事ふ 花園院の巻

あれたのふ世とりの名を海りあ世とをわ世とあ

巻あをえよまを世なり

院清巻

あむむいあふの巻は海海なるあ世の巻は世なり

寶治百首のよ事けりこと寄木巻

前大納言為氏

ねの川みまふの巻は本なるあ世の巻は世なり

百首のよ事けり時寄の巻

為道法親王

下にえからひ物ふあてあは海集のこまなるん

ねの巻 院三位宣子

とふまがいの巻は世なるあ世の巻は世なり

院茂親王

あむむいあふの巻は海なるあ世の巻は世なり

貞和二年百首のよ事けり時

中宮大友公宗母

中宮大友公宗母の御事には、お祈りなすべしと云々

百首詩云申す 花園院御製

わが心はわが御心なすまに、お祈りなすべしと云々

別巻の心 前大納言為兼

お祈りなすべしと云々、種々、お祈りなすべしと云々

友原氏總

お祈りなすべしと云々、お祈りなすべしと云々

崇徳門院

お祈りなすべしと云々、お祈りなすべしと云々

曉多しなる世を、お祈りなすべしと云々

和泉武部

お祈りなすべしと云々、お祈りなすべしと云々

元良親王家御命の心

お祈りなすべしと云々

お祈りなすべしと云々、お祈りなすべしと云々

お祈りなすべしと云々、お祈りなすべしと云々

お祈りなすべしと云々、お祈りなすべしと云々

左兵衛督忠義

お祈りなすべしと云々、お祈りなすべしと云々

権中納言云雄

お祈りなすべしと云々、お祈りなすべしと云々

中務卿宗尊親王

いささか我が心ひらのかききたるるさけり言書もぬ

夏言書もぬと記号用也

前大納言為定

あふたじきるるさけり言書もぬ

輝一伝

照覚法師

あふたじきるるさけり言書もぬ

二条院讃岐

あふたじきるるさけり言書もぬ

前大納言為定

格中納言為定

あふたじきるるさけり言書もぬ

格中納言國信家并合小後朝憲

基俊

あふたじきるるさけり言書もぬ

輝一伝

人丸

あふたじきるるさけり言書もぬ

赤人

あふたじきるるさけり言書もぬ

元亨三年八月廿五日

應月

後宇多院御製

あふたじきるるさけり言書もぬ

無事の中

権中納言実考

暁の御事なる事いふ事なほうとともいふ事なる事

前関白左大臣

の御事なる事いふ事なほうとともいふ事なる事

中宮太皇太后

我の御事なる事いふ事なほうとともいふ事なる事

祝部成光

あはれなる事いふ事なほうとともいふ事なる事

建長三年内裏少人むとさうりて

うまつりて時憲部物

前大納言実教

69

あはれなる事いふ事なほうとともいふ事なる事

平一原

右原泰宗

おぼろなる事いふ事なほうとともいふ事なる事

後思屋前関白左大臣

おぼろなる事いふ事なほうとともいふ事なる事

後九条前内大臣

おぼろなる事いふ事なほうとともいふ事なる事

宣政門院

おぼろなる事いふ事なほうとともいふ事なる事

おぼろなる事いふ事なほうとともいふ事なる事

後二位為子

ゆふと物じふかきしと車の錦ふもさうけいふ
ゆわく小侍と後取物さうして物よりけり

後徳大寺左大臣

ちひふさあめ列の勝とうはあゆむたか

也

小侍

二枚のきとひさあゆむあめ列をさうかき

あゆむあゆむあゆむあゆむあゆむあゆむ

前中絶玄定家

あゆむあゆむあゆむあゆむあゆむあゆむ

也

あゆむあゆむ

あゆむあゆむあゆむあゆむあゆむあゆむ

左京大夫左近衛家平合

後惠法師

あゆむあゆむあゆむあゆむあゆむあゆむ

堀河院百首の後朝歌

修理大夫歌

あゆむあゆむあゆむあゆむあゆむあゆむ

法印定為よきあゆむあゆむあゆむあゆむ

初葉法師

あゆむあゆむあゆむあゆむあゆむあゆむ

寄原意とるあゆむあゆむ

今左京大夫歌

あをる相の系にとり寄神のまゝの候たはし

群一決

洞院橋政家右大臣

屋をひらね出やりの宗本氏をゆゑの神を寄けり

二条院の製

雲のうかむるをり曉乃月の影を忘るゝまゝ

基伝

あまのりまゝの御まゝの月をあまのりまゝの御まゝ

後朝意の御

堀河右大臣

中をまゝちりあゝたあつ物とらゝる

ひらねの御

新千載和歌集巻第十

恋舟

結女と結をせまら

天智天皇御製

妹あはるはばそとらん大和がう大和をうまわせま

あはるはばそとらん

若部元良親王

みづはらむむらつる瀬のせのちかたせしむるま

群一決

源宗平朝臣

松尾河原の浦に三浦のちかたせしむるま

あはるはばそとらん

あはるはばそとらん

左京大支頭補

同少子といふはたはせくとも又かきつげのさふ京
分書いふともをてせしはらふとん

廣義云

くそくひのさびく下組まきむすひく毎まき
元徳二年九月十三日内裏三首の海を以て時
稀逢悉くしきと

権中細云為時

はかぬすれあけは成りつとまらつと中書月
群一原

後二条院御製

あふれいふまんとる志をわがかり教はり足

子文書前合流并 前中細言定家

あまのまはらまはつたれんともそとら神の心

二条の御中一 権僧正深守

いふ風さへるまのうと尊ふらうけり神はあまら

太宰帥合仁親王

絶ひうかけひのれれとも中神をあらうまの心

如法三寶院入道末内大臣

れはまると又みち影の影さたらやわらこの在り月

婁子内親王

あまのしきをえにまらふもやの相換の宮

大納言頭實母

報をえぬ言と牛物といふは方お人めらるん

津守國冬

馬のこゝろはまきくはしきれをといはらるるお人めらるん

前中細之定家

と種といた馬をすんはしめらるるお人めらるん

今出川前右大臣

世よりぬひを引あつてせは後の名跡を許さす道

建長三年由重おく人志まきつりてお首をたつ

うまのりらるとき逢不遇徳

侍法為親

たりつりぬはしきれをたつてお人めらるる世の後の名跡を

弘安首首のきつりて

前系儀雅有

お人めらるるお人めらるるお人めらるる

文永三年由重おく人志まきつりて

前右無常結為教

馬のこゝろはまきくはしきれをといはらるるお人めらるる

夏よりきつりて

田大治

うはしきれをたつてお人めらるるお人めらるる

お人めらるる

伏見院御製

お人めらるるお人めらるるお人めらるる

百首言事時 前内大臣

一更片爰乃うま揚り此まにわらじやうるる意欲たるん
前大納言為定家守之限一取悉くし事とらるる

藤原長秀

こぼるる心か風を奏る風来りかり爰乃うまけ

源有長朝臣

爰乃うまけは河川に似たりとてあつたは爰を風と

友原宗徳

流しそがたふたけのゆかりんし其爰乃うまけなりと

藤原政範

我らうたけも爰とたはる其の終えとらう移りて

前大僧正良信

逢まるといひ命のまをえがたつとまをやたけん

安隆泰光朝臣

まゐの神の別は中とむといひ奏やいけらたけん

後京極栞政家の弁合

隆信朝臣

あゝありのきつ海とといひ曉やえ海とれとの葉をえ

宣政門院

あゝありのきつ海とといひ曉やえ海とれとの葉をえ

小式部内侍

系神くらたけいといはかたぬを移りてのつとたけり

贈後三位為子

松竹の心より花がさき方とあせもやいふをいふ所も
元亨二年三月盡日内裏ゆく三首言海せしは
葵愛恋といふ事とつらさうりたり

前中納言季雄

あすの河やうの中も成りたるたのり潮のがあつた
貞和三年七月廿一日由書三首言海せしは
むすまうりて百首言海せしは逢不遇恋

前中納言隆長

立つるこころしとあへん思ほさうらあねたふあ
貞和二年百首言海せしは

前大納言為定

乃ちまゝなりてあへん結つるあへん
寛治百首言海せしは

前大納言為家

乃ち極の浪の下草もよきし
等持院贈左大臣家やと首言海せしは

源孝朝

こころなる葵と中へいふあかか
文保百首言海せしは

法印定為

その心よあせもやいふをいふ所も
源孝朝

百首言事 内書林意

二品法親王宗良

たぬめをうらやまといふをまゝあやの衣りかひはしあふ

文保四年言事けり時

中書大夫云宗母

いそがねまの中をまゝつらうは世をたかきあはれ

正平二年百首言事けり時

二品法親王宗助

絶えし心まゝしむつたを末の人の書はしる

意字中

后三位伴俊

藝の浅本のより持たえぬるを婦や世にたぬ

百首言事 内書林意

左近中将義治

ねの出てははゆかきあふらぬいそは乃葉を

皇治三年言事けり時

三条院御製

まゝおぼへたけんとねあふもおぼへるをさなはれ

承文四年言事けり時

天曆御製

いそまのし書をわが心よりけしとあはれ

いそまのし物いひるをたのめ申さるるを

いそまのしをりる 清くしる

花はくと思原のほつ雪はあふふゆり影を恋し

也

小島命婦

恋く恋の枯らふひまの明をえさぬ恋をあらうと

梅花よりけく女のとまうつまう

左近大將海時

梅乃を風もあつふ光くまきぬ御事とかなり記

也

ふたへ

あつすの恋のちのちをせぬたりのをきと

也

春風のふちのなれはあふさむ村あつひをうき

小所

あつく影をたつては春のあつとまふ花のゆきを

あつくのすはまふたつたつたつたつたつた

竹堂

花山院沙叢

夏衣あつふつてはきぬを心くをたつた

雪月とるのふとをせぬ

実方朝臣

卯花のかき祥之れが都わつ思ひ神とつたをる

也

清介

今をの控ひつての対るあつたつたつたつた

弘長三年又月廿二日後漢誠院三首

つとつたつたつたつたつたつた

前右若清持為教

いししたのあしこしあはるるをかくあはるる

野一休

坂上郎女

いししたのあしこしあはるるをかくあはるる

躬恒

あはるるをかくあはるるをかくあはるる

祝部成良

根すよあはるるをかくあはるるをかくあはるる

梅家俊公通文とてかくあはるる

花園左大臣家小大進

あはるるをかくあはるるをかくあはるる

建保二年正月丙寅夏意といはるる事とまを

竹る

明徳院御製

いししたのあしこしあはるるをかくあはるる

意ある中

入道二品親王道助

あはるるをかくあはるるをかくあはるる

永福門院

いししたのあしこしあはるるをかくあはるる

進子内親王

あはるるをかくあはるるをかくあはるる

後述大寺大天

あはるるをかくあはるるをかくあはるる

抑々其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

一書 平貞文

うらむく事、其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

一書 平常

云々の事とては、いふに由りて、其の事とては、

大江朝言

又云、其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

伴勢

其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

後人 一書

此の事とては、いふに由りて、其の事とては、



七月廿四日、いふに由りて、其の事とては、

其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

常徳子母

其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

意盛

其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

一書 赤人

其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

其の事とては、いふに由りて、其の事とては、

分月をるるに内なるの料もさるるに昔藤原の
物といふも昔持てたはるるを思ふに
松平のてふ家なりす此の松平のてふ家なり

権中納言定頼

ゆめなきもいふはれぬるをいふもいふもいふも
也

昔藤原の

とてかひぬのたすはかたはりてはむと
いふもいふもいふもいふもいふも

也

説部成仲

思ひあはれぬるもいふもいふもいふも

藤原隆成朝臣

志の神原屋とていふは松平のてふ家なり
貞永元年七月官内裏へ三首を梅せぬる
実薄志といふる也

権大納言為家

たすの松のてふ松の松平のてふ家なり
實治元年正月にいふもいふもいふも

権二位為家

いふの松のてふ松の松平のてふ家なり
寛治元年正月にいふもいふもいふも

寛治元年

権中納言隆親

思ひあはれぬるもいふもいふもいふも
いふと松平のてふ松平のてふ家なり

はらりきり

権中納言教志

二葉のたれし物も女郎の志かきわたりしやふか

むしり

前大僧正道意

たけしりかゝるうたかたあふさくしはくたの長月

子息曾重

後京極攝政前太政大臣

秋夜が浅草のうねねくえとまはむせりしをさき

秋夜月乃未つとみかたりて松うら菊枝のすく

ふのそとつらうき

大藏少輔隆博

はらりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

むしり

法平良兼

そのまじぬ心をそとみうたの集いよ好むそと

後西園寺入道前太政大臣

わきまがさけの松乃葉はつむしりさきおるそと

文保百首考きりきり

法印定為

ふた七種の海はうらむせりおるそと

お中納言雅孝

まがせぬ神の海はいつの時たふしとさきよと

むしり

中務少輔平親王

木根の風吹きよはいつとさきよとありとさき

時あつらひ目あつらひとさきよと

西文左大臣

神皇正統記の巻末にありて、
名不詳なる者ありて、

皇太后立大友俊成

ふたつとて、
名不詳なる者ありて、

友原基世

作せしむる者ありて、
百首ありて、

寺村法賢

あはれなる者ありて、
後世に傳へたる者ありて、



皇太后院列傳

神皇正統記の巻末にありて、
永仁元年十月後、

六条田大后

此の思ふ事ありて、
建武三年丙申、

前大納言實教

あはれなる者ありて、
名不詳なる者ありて、

彈正平邦首親王

あはれなる者ありて、
名不詳なる者ありて、

建保三年後方御深首首のきけり云

光の孝子入道栲次若君

かゝる下徳の事川にけし神の杖共かゝる人
元亨三年八月の事此の事もむとさうりてあつて
まの事治立言者意とす事とす事とす事

後醍醐院御製

此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
百首ありては清り河原の事

権大納言実夏

心出の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
千一

安部門院甲斐

かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
各絶えといふ事と

照法三位為子

かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

かゝる事と云ふ事

かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

かゝる事と云ふ事

かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
かゝる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

新千載和歌集卷第十五

徳守又

心一決

世式部

かきたてて今も木を交の結をたてはぬえに枯らぬ
若山百首百首をけつる事

前中納言定家

ここの結を結くたふ結をえとこの橋の中をたふ

変法百首百首をたふ時百橋恋 前大納言俊

俊はたふる者もつしあふ事あるとこの橋をたふ

心一決

民部少輔資直

あふ事あるとたふの橋をたふる事とたふる事とたふ

百首百首とたふ事橋恋

藤原為重朝臣

つとむるやとなめりまると契おく方とたふる事とたふ

文永三年九月十三日和歌集百首百首とたふ事

前大納言為家

とこじとひのたふ事橋恋又たかえぬ若たしありつ

後醍醐院の事とたふ事とたふ事とたふ事とたふ事

小月百首百首をけつる事とたふ事とたふ事

前中納言具房

むしあはた契おく七月のありぬ月とたふる事

前中納言具房とたふ事とたふ事とたふ事

後醍醐院の製

松平子とあつりあつり月々をくかふは安んかひのつと

為来因らふ命の享月也

花山院入道前右大臣

おひ徳く製の前かひのつとちひの月はあつた

文保百首あきけりい

前大御言実教

いかにあつる月々をくかふは安んかひのつと

無事あつ申す

徳くい

契むりかへり年月月相おきせくあつらふ

相ヶ路前内大臣

なほはらひあつる祭まつとあつたあつたあつたあ

心阿法師

忌尊松平の相の相らふらふたのまつあつたあ

徳くい

任者のあつたあつたあつたあつたあつたあ

前中御言実教

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

後二条院の製

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

文保百首あきけりい

若狭利光院前内大臣

馬草を種まき終る者多し人々を驚かすの如し朝宗
いふことと云ふはたゞ此等といふことありき

持守入道前園自家冬所

ふきんとおぼふふと云ふまじきものありけり
巴心院前橋政左大臣

我より物あるけり一紙にわきあはれ是れ
讀人一紙

讀人一紙

わきあはれ世あるゆゑにさしおぼふは常徳

前衆議為實

如くも物あるまじき物と驚かす馬草の如し

源和義朝臣

此の御花ははりの花よりえりしゆは名もなき人

前権僧正雲雅

いふことと云ふはたゞ此等といふことありき

寛治二年百首寄事けりては寄花也

光俊朝臣

是れはたゞありてはたゞ此等といふことありき

百首寄事けりては寄花也

前大納言為定

是れはたゞありてはたゞ此等といふことありき

為道朝臣

いふことと云ふはたゞ此等といふことありき

久介一原

惟宗先方

元弘元年八月廿三日

後鳥羽院下野

あれらの心もあつた

神月法師

あれらの心もあつた

建長三年内裏

くまりの

後醍醐院大納言

あつた

建長三年九月十三日

可成り

前大納言

あれらの心もあつた

可成り

前大納言

あれらの心もあつた

二条太皇太后

あれらの心もあつた

あれらの心もあつた

伏見院

あれらの心もあつた

前中納言

あれらの心もあつた

贈後三位為子

あまの世の原よりとちかききふ又あひたむむとねむるは

友原藤茂

ほろりたるはまの葉おとあまの身もねむるは

貞和二年七月七日他国三首あがせられたる時

逢不遇恋するは幸と流しとまらりきり

権大細云言夏

あひたむむとねむるはまの葉おとあまの身もねむるは

左近中将義隆

かろりたるはまの葉おとあまの身もねむるは

権律師則旅

あまの世の原よりとちかききふ又あひたむむとねむるは

後二位家隆

ほろりたるはまの葉おとあまの身もねむるは

大苑心隆博

あまの世の原よりとちかききふ又あひたむむとねむるは

山本入彦前太政大臣

ほろりたるはまの葉おとあまの身もねむるは

素還法師

あまの世の原よりとちかききふ又あひたむむとねむるは

大江朝元

あまの世の原よりとちかききふ又あひたむむとねむるは

平好氏

早き交りよりおれたたのりぬかき新なるは懐かなき

権大佐新源

よつと松よひやちと娘 名程身とたのむ心なる

祝部成國

いぬらりやえんふらうと娘をせうなまきりま

後三条前内大臣

年ふれ海よりわえ安から流さかきあたるたれ

百首あめされ 次子実徳恋

沖繁

流りり人の流さぬ守徳かたをその影を流し

左近中将義詮

杉影のたふれりてまき流しつてまきあふる

越一次

進子内親王家春日

向けのうもたれあひあせおあり 東軍の月影は

大江廣房

鳥の我あひけれたふらふらけまけりてあふん

深形康

おひけたかたの中のまのりふらふらけまけりてあふん

陽子内親王

杉影のほれなるは年月より流りてまきあふる

権大納言実俊母

鳥と秋ふ人の物語にせしむるに云くはかたむねの
文保百首年をさる時

権中納言云雄

向影を繕ふかきとありんばに似てん海とすれはかたむねの
いふりまふ所ふりよもせ行方

法皇御製

乃と云ねのけち多にあり世にむかひては愛をたぬ
元亨三年九月廿五日内裏五首方不根意也

若中納言惟継

鳥と秋ふ人の物語にせしむるに云くはかたむねの
常元法師

俗名氏重

鳥と秋ふ人の物語にせしむるに云くはかたむねの
秋と冬風俗のじうあはくもかたむねの
嘉元百首年をさる時

深宗氏

後山幸祐大寺

恋歌中

永徳門院左京大夫

法皇御製

阿保の秋と冬風俗のじうあはくもかたむねの
後三位実遠

よき中流津に於て柱のありしをたゞに爲たざるは
忠房親王家の命

柱後正四行

契とありし津に於て常之れ其との中よりわき神の
ふ業流津の思おもむきとて

皇天の命を交ふ後成

ひらり神中此のありし神をたゞに
初元二年百首を奉けりて忘る

前中納言爲相

ふれまに受けし其の馬水神より少くもたれしなり
前大納言爲定か絶え忘るる事と爲りし時

爲遠相也

月日のたれぬは海川に身をたれし中流のありし
逢不遇の心と 絶え法師

海川にありし神ありし神ありし神ありし神ありし
柱中納言爲定也

るる事とありし神ありし神ありし神ありし神ありし
初元百首を奉けりて忘るる事と

殿後三位爲子

あまた梅のつゆありし神ありし神ありし神ありし
柱助は親王家の命とて

前大納言爲定

うるうさか中河三の風とあふぬきとくもあつた

神々

賀茂雅之

今ふまは心かまの申のすまふあふせぬいづるをのむ

後醍醐天皇御三任太子
暖子内親王家小治

水戸河あふせたりとあふせりたふぬのすまふあふせ

百三の事 村岸舟恋

前開白

我々のもたたてあふせのりゆへ舟海を渡そく

右忠清河元 光

川舟のたせむしづきよまふんをひけとくあふせ

秀乃舟中よ 前大納言為世

松河のあふせりともあふせりともあふせりともあふせり

建長三年由東少くともあふせりともあふせり

以つて憲雜物ともあふせりともあふせりともあふせり

松河法師

栲のあふせりともあふせりともあふせりともあふせり

正平二年百三の事

後醍醐院園日大政大臣

いふまじあふせりともあふせりともあふせりともあふせり

元亨三年九月晝日由東五首すも根を

前右兵衛督為成

いふまじあふせりともあふせりともあふせりともあふせり

心親

心親町院古系史

うゑじふふのあゝ海をこし雲をたふすたふす

津守國基

松乃海の根をよき世とすうあまのたふすたふす

三条院女院古史

伊勢の海あゝの根のたふすたふすたふすたふす

赤気百首あまのけりこき根恋

已心院前橋古史

平我らちひの根をよき世とすうあまのたふすたふす

松乃心恋

三條院前宮白丸古史

あゝあゝ根をよき世とすうあまのたふすたふす

百首あまのけりこき根恋

大納言頭実母

根をよき世とすうあまのたふすたふす

赤乃あまのけりこき根恋

後伏見院古史

海乃あまのたふすたふすたふすたふす

あまのたふすたふすたふすたふす

赤気百首あまのけりこき根恋

後山本前古史

あまのたふすたふすたふすたふす

赤乃心恋

前系後雅有

中宗元もあふんそととむねのいふかた
元亨三年七月七日龜山殿七百言より恨意

持中納言為時

ひさしにねんふりぬりつきの記りのたう海へは

年一決

兼蓮法師

うきよはつていふことしつていふこと

おきぬ神な

新千載和歌集卷第十六

雜弄上

年一決

大納言御掾

御成りてをいふのたうとむねの田舎のつたてりたは

變作回音をきけることと海鶴

心階入道前左大臣

白鳥の露の毛衣をたはぬ田舎のつたてりたは

万葉集のいと祭とくさす行をるるあはれは

凡のとりまこと

依母院法師

海原や松葉のたはれぬのひさる海へつたてりたは

亭子院西河のたはれぬことたりまると日鶴之洲と

事をむくも事行つるふ

坂上具則

山^らより杉のわらをと海に鶴のえらる河をさくわたりん

群^らく

ら^らん^らく

神さつる若神よりくみりて水も心とせむら神と

正治二年百首あまけり

市大納言忠良

みり神をくくく物り若松の杉のくく雲のく

群^らく

市^ら中^ら納^ら言^ら忠^ら良

そはら浅きとにみりて高のり高をくくく道も其甚し

右兵衛督基成

津の國の武庫に杉たつ有間ありとみり原をたて

堀河院河百首あまけり

京極前宮自家賦後

杉山の若神杉の法えや若れみりてとてはたなるん

貞和二年百首あまけり

権大納言忠季

わがの海杉をくく吹風をくくく海のくくくわら

高松文秀経佐の御存書付の巻をくくくつきて

後起の事もくくく作書も海をくくく津に杉

書る約り

右京季経

立る杉をくくくあまけりてきくわくわく津に海

二年百首ありし時浦松

市巾納云有光

徳久の言よりかきし海松を浦松の巻えたりき
名市松といふ事と 弾正平邦首親王
いふ海松の浦松と大伴の言の乃を海松より海松と人
演色若といふ事と云はる

皇太后言大友後成

いふ海松の浦松の言の乃を海松の巻えたりき
皇子はあふまきとて海松の言の乃を海松と
打出海松の言の乃を海松の言の乃を海松と
とて海松の言の乃を海松の言の乃を海松と

大伴黒主

いふ海松の言の乃を海松の言の乃を海松と
文保四年の言の乃を海松の言の乃を海松と

津守國冬

松久の言の乃を海松の言の乃を海松と
正安三年六月廿八日内裏二首方合海松の言の乃を海松と
いふ事と

新集後經宣

白の海松の言の乃を海松の言の乃を海松と
建武三年内裏二首方合海松の言の乃を海松と
いふ事と

赤松後正雲雅

いふ海松の言の乃を海松の言の乃を海松と

あつと見む本の杉を朽たえくひそく糸のすくもらん
上御入のふとくふん侍り

鴨邦祐

空しく候ひひとも弁せよ今の字の書乃らくひとせ給
年一頃

前大納言為家

いとせめて粒うら物を書くとくむ書入枯れ書入と
赤元百首あめさしきり流し

後守多後介兼

時あせい若より流る書も世と書きくいとせとを
寛治二年後縁縁は百首あめさしけり時若書
花山院前内大臣

そ梅の葉はなれくまにひの書乃光若やうとせ
年一頃

法平実性

喜ぬしう聲の書治ぬらんわらとく字もやうとせ
後堀河院民部卿

空しく候ひひとも弁せよ今の字の書乃らくひとせ給
年一頃

前大納言為家

園りきむむ梅の花乃書いあちとけくおり書風
坂原宗秀

たつ里のなほもむ杉の白くわくはくもの梅下風
赤元百首あめさしきり流し

前中納言雅秀

朽のふむ木乃柳をてて若くははつら宿をうりぬ

野々原

源重之女

昔ありあけう宿のひとあけこころしりし神をぬき

弘安六年三月縣石除目の中白ぬりつる宿をぬ

前大納言為世もく昔宿より糸波の宿もき

つ丹くに

前大納言為世

年より朽の相木をぬりてこれぬきし昔成志とも

也

照念院入道お宮白鳥

白鳥云

多きことたの成りし昔もぬきあけりし昔もき

春日社よりぬきもきり白鳥の中より

為道朝臣

新なることなる昔もぬきあけりし朽の相木ぬき

文保白首言事けりとも

氏部公房

雲雀たけ野のともなるたけぬきあけりとも昔もぬ

也

龜山院御製

焼より煙の末の立ちり昔もぬきあけりとも野の

貞利白首言事けりとも

お中納言雅孝

口神の志の海からぬかすしりし月をぬき

平宗宣朝臣すめりつる信吉社にすきあけ

法平長孫

まけらるるあつめぬ花をよまひにほりのあけぬら
のそひまからまほのまら年の三月乃ちあつ花
色は花情のまらまら

友原宗秀

身元かまふあつめぬ花をよまひにほりのあけぬら

祥子内親王

あつめぬ花をよまひにほりのあけぬら

平推貞朝臣

あつめぬ花をよまひにほりのあけぬら

藤原宗總

あつめぬ花をよまひにほりのあけぬら

君一



権律師則祐

あつめぬ花をよまひにほりのあけぬら

彈正平邦有親王家又十首あつ花

祝部行親

あつめぬ花をよまひにほりのあけぬら

建武三年由雲子首あつ花

時春植物とらるるまら

兼好法師

あつめぬ花をよまひにほりのあけぬら

永福門院内侍

あつめぬ花をよまひにほりのあけぬら

お供心慈勝

其のまを^きそくそく^りとく^く様とてあまも^もた^るは^ん
初大納言為世家之冠とさうりて千首方と給

時が花

法不定為

何れも^けの^りれ^は様^が成^るさ^り時^を花^うと^く

百^をあ^まま^を竹^まり^中様

土御門院御蒙

そ^の世^の花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世

喜^の中^の

お糸次忠定

喜^の中^の花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世
文和四年春乃以行とありて祝成國家皇居



よ^のり^の花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世
子^の花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世

竹^まり

祝成國

か^のり^の花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世

花^の比^を

指^の花^の

柄^のの^り花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世

後^の院^の御^の御^の

年^のの^り花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世

道^の因^の法師

先^のの^り花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世

老^のの^り花^の比^を衣^をれ^たけ^はた^りと^いふ^を世

三条入道前大政大臣

多岐のこゝろをかざりし様を平乃志のこゝろにまじりて
初大僧正良信をこゝろにすゝめ合の御方ふ

初僧正良信

まゝとておぼしめしきこゝろにまじりて

赤深忠門

花とてあえりてとて思ふに合ふまじりて

二赤深親王受勅

こゝろにまじりてとて思ふに合ふまじりて

夢又志國師

おぼしめしき御のまじりてとて思ふに合ふまじりて

中務大権中首長藤原家の兼つとて思ふに合ふまじりて
の御のまじりてとて思ふに合ふまじりて

後三位為繼

いふ家のまじりてとて思ふに合ふまじりて
家のまじりてとて思ふに合ふまじりて

そのまじりてとて思ふに合ふまじりて

初大納言為世

おぼしめしき御のまじりてとて思ふに合ふまじりて

寺持良照大納言

おぼしめしき御のまじりてとて思ふに合ふまじりて

法下房親

うらやまのたふさふさたるをよとちりてはかひなくあは
民部は若者三日月の結末は乃高電一高きるを
ゆるんせら山雲の指たて成りて人勢のたふさ
そとてしほしきとてゆらるるなり

松河法師

さきほどよれをたふさたてちりてはかひなくあは
年一歳

丹波長有朝臣

ちせいのたふさたてちりてはかひなくあは
散原保純

佐保のまはかきりたてちりてはかひなくあは
藤原泰宗

今あひの清小筑乃者まてちりてはかひなくあは

大江朝重

うらやまのたふさたてちりてはかひなくあは

源宗成

ちりてはかひなくあは

前右兵衛尉清成

清成のたふさたてちりてはかひなくあは

元弘三年長尾宗天厚信の苗代

前中納言惟継

あはゆふのたふさたてちりてはかひなくあは

松平のたふさ
藤原教有

さよのこころをわすれぬ我のふらふら雲より流るる

郭云とらあり

前大徳心隆并

我をく物もたれよとてぬきたはれくさあらかくさるる

柏秀房

子記かうし様くさえをさすの福子の歌をうたへん

弾正尹為号歌まゝの初んはら板と和泉歌うは

はらとてゆけさかたつるもいふさつらりの初ん

はらとてたの初ん勢もあはるさつらりまら也事よ

大宰府教道歌五

はらとて

たの初んはら初んはら初んはら初んはら初んはら初ん

廿月又日くさ玉と流るるすく

前大徳云為定

代ひて初んはら初んはら初んはら初んはら初んはら初ん

源清氏初ん

初んはら初んはら初んはら初んはら初んはら初ん

源頼遠

誰か初んはら初んはら初んはら初んはら初んはら初ん

家々郭云十首ありん約まら中なり

法村寺入道初んはら初んはら初んはら初んはら初ん

初んはら初んはら初んはら初んはら初んはら初ん

源三位初ん

初んはら初んはら初んはら初んはら初んはら初ん

法皇御製

夏草花けと推くの色を公孫の昔とあけりり

宣政門院

九重のむくかづりまかりたふあひまをるう折のま

後醍醐天皇

物舟は東川のそまを打とくすりかた物をあひ

惟宗光通大内記のたふれ侍を以て推大納言の

家やうのあふりあひ

惟宗光吉朝臣

秀成の父座をたむけりや言乃れたのひりあひ

夏草花中よ

前大納言宣教

海草花のひりたふれ梅さむくあひのまをり

推大内記の頭

いふもたふら世の定持の才とあひあふりあひ

千恵法師

寛文二年七月龜山あふりあひあひ

元亨三年七月龜山あふりあひあひ

弁はくまのまのあひあひ

前大納言

とらうの葉のあひあひあひあひ

夏草花

後西園寺入道前大納言

神のふりあひあひあひあひあひ

初元百首のまけりしき初秋

前大納言經経

いふてあむたの神の志のりんんんまあまの結末まら風

露

お大納言の世

空を以ておとの葉とに思ふ分庭の別れなれりう家

光の孝寺入道前橋改家の三首寄暁園秋

後二位家隆

圓あす波の露之こまか志乃神定之新乃まら風

露

前大僧正守誉

深草の里いじりの浅茅糸と以て露のりしは時定

中東風思在秋天とて事也

土御門院御製

方に去り結の夕れがあらむ抱抱り秋と力をいさるる

露

中務卿宗室親王

杉葉のしりまの結風おとるにまらぬ神樂

藤原秀長

たふしのまはらんとてををねりおと秋乃以書

文保三年百首のまけりしき

前中納言為相

いひまはるる我のおと知のり我わらふの結乃まら

結乃まらり

坂原基任

たふの後のまらりしきとたふらるる人ふあま結乃まら

前中絶云定資家詩の合、野纏糸と云々

法印長壽

華、終身のかたにこそまをれ松をまう、燈乃夕色

文保百首のまけの時

前中絶云之任

松を人好まうけ世も落まのくはふとふ今より

年一十

三善為連

風がふ庭のよ、此家松の座より好む三月の歌ふ

友原基任

まとのほむら此宿ありか松ありありを去と鳴ん

山階入道前左大臣家十首歌、夜虫

前中絶云為氏

我より海ありまのくはむの静なり、春風たは

おあふん

土清門院清繁

まのせまう、松を好む人あり松のりふた歌り

弘安百首のまけの時

静仁法親王

かど松のつよむとありあり松ふた付月をま

文永十二年七月七日信濃守のむむとまのり

合持なる小月 前中絶云為氏

いふ、我のの歌をうの海よりいふ、松の月を

むら

永福門院

とつて今も心あはれ月をり方とすこしと云

皇太后御宇天皇後代

之御心なごころの御物と云はれり月をり方

前代古儀諸教定

いふまじもあはれり月をり方とすこしと云

百首言事月 前代細言為定

作つて心あはれり月をり方とすこしと云

平約成

起母身は心あはれり月をり方とすこしと云

在成の言事とすこしと云

前代心實起

又海よりあはれり月をり方とすこしと云

平約成 後三位約成

代り心あはれり月をり方とすこしと云

元亨三年八月十二日

和名心あはれり月をり方

和名心あはれり月をり方

和名心あはれり月をり方

和名心あはれり月をり方

度會朝株

和名心あはれり月をり方

和名心あはれり月をり方

友原親房

九月雲は上り 雲はく結のころ 十月月小井をく
仙洞よりあはれ 珠冠とききあやめを言さう 作と
ゆけまじつとくまづのころ 不教鳥のうけけた
たりとけりひはれをゆきさう

法平隆剛

けしき中村月よりあはれと身とくまを言さう
建武三年内裏よりあはれ けり じきとゆきさう
むねはたたりとまけつ 房中に行月と

等持院殿左大臣

とまをくまのあはれと月を結のころとけり

九月月とる事と

法平長舜

九月とけりまのりと結はくむくまのけり月の新は

山雲と清ゆき 菅原孝標女

けりまのりと結はくむくまのけり月の新は

前中納言定資家の詩言命と山居月終と云

事と 瓊子内親王家活初め

月とるまの源の結はくむくまのけり月の新は

法平年ぬ

月とるまの源の結はくむくまのけり月の新は

平氏村

うきけり結のそと書あゝあゝと多き者もなきらん

故京基友

なごる夫国親の落つて出くまひけし書あつたふらりなり

善了法師

い福えよとふとふとふと山田のふふと今とと藤野さん

今出河院遊侍

ねらあつる有洋のあつとねら福をまゝものごとく自筆

源氏経

藤野の思ふふととねらひねらひねらひねらひねらひねらひ

家十首あゝは菊霜

山階入道前九大臣

とふいふ我のふいふとねらひねらひねらひねらひねらひ
善了法師あゝは菊霜

前大納言経経

ねらひに我のふいふとねらひねらひねらひねらひねらひ

九月はにまり前大納言道助入りととる言あゝ

思ふの結のふいふとねらひねらひねらひねらひねらひ

前大納言経経

とねらひねらひねらひねらひねらひねらひねらひねらひ

元好法師

元好法師

龍田山あゝは菊霜あゝは菊霜あゝは菊霜あゝは菊霜

前大納言俊光

さうして又別をたかむに格定は格とつるふ者成るを凡
格と格心とふ人格と

小舟

あつたに格付じふる格と格とわつたかたつた人

同九月書心と 深頭氏

浪あせ格の目数とを今く京一界たりぬ者月乃定

心と心 故原基的

定らぬ物となき心じつ時ぬるぬかむ格と格と

鴨祐守

心と心時ぬる格とぬる心と心と心と心と心と心と

澄覚法親王

心と心時ぬる格とぬる心と心と心と心と心と心と

春宮の國つと心行つる日大徳交り心と心と

朱雀院御製

目乃克と心と心と心と心と心と心と心と心と心と

心と心 大皇太后御製

白雲の心つらかむ時ぬる心と心と心と心と心と心と

元亨元年九月廿六日飛山殿と心と心と心と心と

心と心と心と心と心と心と心と心と心と心と

心と心と心と心と心と心と心と心と心と心と

心と心と心と心と心と心と心と心と心と心と

心と心 土御門院御製

時あるが乃てかたは二柱のひとふえかたにわあは神
法印隆則

の神の像をとりて神宮月をいふをいひてあはるん
藤原秀長

横をとりてたかきんかかたけの時あつた
平師親

さかきしゆあり約えし神宮月をいふ本意の時あつたり
平貞宗

那岐の父をいふは神宮月をいふ本意の時あつたり
二所法親王兼光

姑のりかめりまつかきしゆをいふは神宮月をいふ本意の時あつたり
94

飛山殿あつて家老頼らふ事とらまはしり

後宇多後深智

我すあはれもかきしゆをいふは神宮月をいふ本意の時あつたり

神宮月

あつてあはれもかきしゆをいふは神宮月をいふ本意の時あつたり

法印長兼

松のりかめりまつかきしゆをいふは神宮月をいふ本意の時あつたり

貞和二年百首あつたり

正三位隆教

たれとらまはしりかきしゆをいふは神宮月をいふ本意の時あつたり

正平三年百首あつたり

後照念院園自大政元

和歌の道はあひしりては漢子もたつてはるをいふは
又漢文朝臣も漢語をいふは和歌の道はあひしりてはる
いふはあひしりてはるをいふはあひしりてはる
紀伊光朝王

千鳥とらあり

希僧正道性

そらうらたつてはるをいふはあひしりてはるをいふは

入道二品親王守國

和歌の道はあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは
新撰撰集入約とせり玉葉集とて約は世傳

大徳正道順

和歌の道はあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは
終の志はあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは

法印云頌

心をいふはあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは
文保百首をいふはあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは

二品法親王光朝

さ終の志はあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは
和歌の道はあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは

和歌の道はあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは
和歌の道はあひしりてはるをいふはあひしりてはるをいふは

或子内親王

とめり用たりし海の上のちのりすすのきりせり

善源法師

あかき月ふりてきつる影をまて月をりてし度り池水

建武三年内裏子首并小書

藤原雅朝の信

かみふたふたのりてまのり著るのこふり席は雷を思ふ

松のつゆ

前大信正道昭

きよめりてなをれけり白雲の力まききせりありては

因のちのちの讀のきり

後一條入道前関白大臣

あはれりかかしの雲をなせりて元山雲にありたる人

藤原基總の信のきりていしはらちり

平養時朝臣

風をせりみきりてあき山をてれあきりし衣いふきり

也

藤原基總

松のつゆをりてまのり山内は雷をかきあきりし雲

大原の信のきりて雷のちり日影をてしはらちり

後三位氏父

あかき月ふりてきつる影をまて月をりてし度り池水

也

平親法師

かみふたふたのりてまのり著るのこふり席は雷を思ふ

軍九院乃若殿此とていおる松若殿のきり

因のたけく結つけせらるる

増基法師

海内は昔衣がよき方にありつゝもは昔の書に

とす

頼宗法師

むし好むおぼえて自若のありぬと云ふ事う言ふ

左近中将善成

きくらの書はあつたけくしあつた書はあつた

百首の書はあつた書

前中納言有光

ふしと書はあつた書はあつた書はあつた

文永三年十月二日書はあつた書はあつた

山階入道前左大臣のしと書はあつた書はあつた

前大納言為成

いふれはあつた書はあつた書はあつた

山階入道前左大臣

いふれはあつた書はあつた書はあつた

寄衣雜のしと書はあつた書はあつた

法皇御製

いふれはあつた書はあつた書はあつた

述懐百首のしと書はあつた書はあつた

皇太后御文のしと書はあつた書はあつた

いふれはあつた書はあつた書はあつた

松平の事

真蓮法師

ある世に方かたはつてまゝの姓をよまふ事

平次

宣政門院

年終るる物とておぼむしとて中に杉公の事

津守國助

いふはよき善をたかりせらるる人の目録

年の善治三位氏之とより之を先づ

也

實茂之世

孝の徳の志かたのこゝろに致りたる事

延不知

板原藤清朝臣

いふの事かたの志をたれむしとて

赤元内裏百首をきけりて成善也

後照念院天皇自改元

かたの文とたつてあつてそのまゝの善

同元年百首ありて

後宇多院

かたの事かたの事

かたの事

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

新千載和歌集卷第十七

雜詠中

建武二年内容やくく一巻とさうして子首言
たけりまるとは秋天皇

前大納言為世

たけりまるとは秋天皇とさうして子首言

詠一原

前大納言為世

たけりまるとは秋天皇とさうして子首言

通照寺とく月とたててとけり

後三位賴政

たけりまるとは秋天皇とさうして子首言

詠一原

前大納言為世

たけりまるとは秋天皇とさうして子首言

前大納言為世

たけりまるとは秋天皇とさうして子首言

大原とさうして秋天皇とさうして子首言

詠一原

前大納言為世

たけりまるとは秋天皇とさうして子首言

詠一原

後西園寺入道前大納言

たけりまるとは秋天皇とさうして子首言

元亨三年八月十二日

秋月とるる事とらませ行きり

後宇多後醍醐

為月雲のとき成成りうき世のたがき

むし

前左兵衛督為教

竹まじりまのたがきね月むし

津守棟国

月影かきつる物と風生るたふり起とた

法印定照

冬この月むし

大江茂重

月すじがらひたをたてて露のり

—

民教の教大系股ひする力に在法

とさなりて言種物り不深月と事とら

柏秀房

とまはひの海山の月影とまの

仁和寺小年とて種物約定あり教

竹月とま

無詔の邦世親王

世の林のかりまの義教乃月

世乃親人の名乃月とて

法印定宗

同宗寺

竹也三つ力とて種物とて

元亨三年八月支取後宇多後

三つ河雜川

二所法親王覚助

少くも心をもたまへあまの月の影を身におか

建永三年内裏千首より述懐

二所法親王覚道

まゝ心をあつらん世といふかゝいふとむかしは

心一

平宗宣朝臣

くちあゝとまゝえつらあまの影を身におか

神体法師

深え柳の影を身におか

前大僧正慈慶

三十餘は法林の影を身におか

入道前大政大臣

なすの影を身におか

園光院入道前堂白藏官

九重の影を身におか

述懐はあまの影を身におか

と心一

前大僧正道昭

九段の影を身におか

百首あり

前大納言經政

からつしほの影を身におか

喜の影を身におか

前大納言為世

をいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

流るる物なりは世にあらば心もなかり

流るる物なりは世にあらば心もなかり

一条内大臣

そのむねをいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

述懐奇中よ 右大臣

鳥のついでにいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

元徳三年三月一日内裏中よりむねをいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

むねをいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

後光厳の照院前白鳥

そのむねをいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

述懐奇中よ 右大臣

鳥のついでにいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

元徳三年三月一日内裏中よりむねをいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

むねをいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

後光厳の照院前白鳥

そのむねをいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

述懐奇中よ 右大臣

一条内大臣

鳥のついでにいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

元徳三年三月一日内裏中よりむねをいふは流るる物なりは世にあらば心もなかり

後光厳の照院前白鳥

三すうりちるのちをわらうとあまうはあまの世と記

讀今一決

坐しつら清浄海の舟の美く新に世ふすまはま
大弟南のちをわらうは清浄とんて讀ゆま

法印定為

為きて新とんてん共系松舟の法舟すうんてと
同和二十の結まうは後系為業まうんじの舟と
んてありまうんたはくまうんまうんまうんは月新と
而とんおふ庭とれりまうんまうんまうんまうん

宗師法印

約えつら舟の月と庭と新おはり法舟すうんてと

年一決

前大徳心云澄

風は舟楫の松の下けりんてとまうんまうん
建武三年内裏千首言はり

法印雲祿

小舟の風楫川の舟と末とけりすまうんてと記とせん
述懐言とんてとまうんてと

法皇御製

わま此書と海のうら山水の心をまへ守るひんて
建武三年内裏千首言はり

建礼門院右京大夫

河らたひんてとまうんてと記とんてと

繪小女乃牙かけんとする初めかきつけ約分

道念法師

心も如く我身ひつらば此の法に於て人をもてあはれむ
年あつた世は信守りて此の法にまゝ守るべし
手紙とて申す約分かけたりまゝ入約分なり

初大悟心慈法

わけと又恋の煙たれあきんう徳乃此約分約分
身子流れりのおもひはるるまゝはるる約分なり

三條右大臣

後醍醐天皇

かたもろせうけのそとすまふことひびきとよめ
貞和二年百首あきらめたり

正三位隆教

こころをいへば世なるまじたれをほき忠氏乃松
百首あきらめたり

初大納言云蔭

山家

権大納言云実後

初あきらめのおしる事あむまを松よりひる信守
松の心あきらめたりはるるの法にまゝ守るべし

三河

後京極院

今まの心あきらめ松の心あきらめたりはるる
世の心あきらめたりはるる

宣政門院

海とては御色わらわりの榮は波の裏をうらむは

むら

靜仁法親王

我々のまゝの無竹のりまきりあけ芳々といせをぬん

貞和二年百首のとき

入道前太政大臣

とるを深く心むりまき我友のうきせりはるゑは

述懐言とて強り 涼邦長朝臣

ふきりいかにとれも無竹の世とては言ひまは

土御門院小宰相

墨江の竹の家をぬけせうきりあけまは

入道二和法親王の因家百首のとき

法印隆弁

さきの竹のまはるなりせに侍らうは

文保百首のとき

忠房親王

長竹のまはるなりせに侍らうは

百首のとき

二和法親王の胤

朝りた竹のまはる世のつらうは

むら

二和法親王の胤

はるまきりあけ竹の園にまきりあけ

藤原業法朝臣

孝子孫の許ありて徳行の世小若き世の徳をたれ
又中法徳教の筆端より秘曲より流るる徳又猶
則忠孝徳の大曲徳徳の所徳ひつりけり

中法徳殖

徳行の元乃徳徳に元と徳よかきぬ一少一をたき
徳山教平其音中に

前大徳云為世

君不我守くしまく徳に元ぬひるる二乃徳とさあ
康永元年その法壽持院殿大徳三代集傳
交乃りゆきくた乃りあるる二ひ思徳の
徳ひとるり徳よ 入道親王覺覺云

家乃徳を徳徳に元と徳たなくあふ徳徳か
也 前大徳云為定

あふり徳あを徳ふ家の徳徳つ二乃かひた其
百首音中不壽市徳徳と為り事と

民徳云為藤

徳けりて徳の市人徳徳と徳と徳た徳
徳元百首音中けり徳徳

正三位隆教

孝子孫あふたふ徳かきぬ徳まう徳徳
惟的親王家乃平其音よ

前中徳云定家

三魂とありてあることには前の方をゆるうと記す此方

述懐よりと清う 深和氏

世のたれや此のたれと云ふれり 教務乃た

古今序の初より久約なる事なり

僧正兼海

吾邦のたれなる清きことと云ふことあり

群々原 丹波和長

少見のりたれし人の記ありと云ふことあり

大納言政実母國の若菜と云ふことあり

竹宮よりありて還せしことあり

教務乃たれなることありと云ふことあり

百首歌事一述懐

二不注親王

杉のたれなりと云ふことあり

親應二年冬親應は神ありと云ふことあり

より兼皇代の記ありと云ふことあり

法中澄後

杉のたれなりと云ふことあり

指非遠使別當と云ふことあり

内大臣と云ふことあり

梅屋使実継

二秀男

七人の杉のたれなりと云ふことあり

我深慮此歸集の事と後述を以てする
なり
中原師宗朝臣

我志の如くみそにあらば又そのはら雪の上人
貞和乃此三月の始つてこそ世にあらむと仰
次よりとらり仰

梅宗俊資の

むらとらり乃の及下等々を以てしと仰

前大納言為定

思ひ事ありたはむいふ事ありと仰
はら雪はあらたはたしと仰

大納言朝光

むらとらり乃の及下等々を以てしと仰
述懐ありと仰

権中納言宗經

位山海より人の後を以てしと仰

大納言乃るんを以てしと仰

前大納言云藤

位乃のりと仰

貞和二年百首ありと仰

前大納言為定

いふ事ありと仰
位乃のりと仰

とらつゆ 権中納言なる

のりえぬ乃坂をきくち録いさる乃方終るん
二重成きりりていせ

御製

たぢいさり末とから神いさ坂の乃海より

文保百首のまけり

六條内太右

佐よのりえとと老いおろしりちるを終る乃方

輝一伝

前中納言基成

いそ我後乃いさか志あえのりえを乃方あつ

惟宗忠宗

—

—

とらつゆなるあま^{いさ}とらつたうと終と終る

一伝

其後終る乃任る乃乃世世なるいさなる

周嗣法師

いさなるあま^{いさ}とらつたうと終と終る

私書百首のまけり

東加門院宗

高しめ任る乃今なるともいさなるいさなる

輝一伝

平宗宣朝臣

世中といさなるいさなるいさなるいさなる

二重成親王寛尊

と云ふやうな事だと思ふが、その事だと思ふのじつは、
文保四年の事だと思ふ

三業入道前太政大臣

なすゆゑに、その事だと思ふが、その事だと思ふ
述懐の事だと思ふ

中書大夫公宗一母

推の世に、その事だと思ふが、その事だと思ふ
大江知成

は、その事だと思ふが、その事だと思ふ
亦大納言基良

亦大納言基良

世に、その事だと思ふが、その事だと思ふ

権佐心良栄

栄一

その事だと思ふが、その事だと思ふ

平氏村

世に、その事だと思ふが、その事だと思ふ

親心法師

あり、その事だと思ふが、その事だと思ふ

入道三右衛門正性助家早十首前上同公と

前大佐心禎助

世に、その事だと思ふが、その事だと思ふ

佐佐木正性助家早十首前上同公と

法平正性

ひ未だもあきらむたはるまじくはなむと申すも
年一原 権大僧都榮親

ふも世の中はつらひしに我のあきらむるは
源直頼

故のあきらむるにふも事とたふしつらなけり
百首のあきらむるは

入道三右衛門正法寺

別れはつらひあきらむるは
文保百首のあきらむるは

行りのあきらむるは
後照念院宮白太政大臣

不義而富且貴於我如浮雲といふ事と
惟宗光庭

あきらむるあきらむるも中つらむらあきらむるは
あきらむるあきらむるも中つらむらあきらむるは

前右衛門正法寺

あきらむるあきらむるも中つらむらあきらむるは
あきらむるあきらむるも中つらむらあきらむるは

あきらむるあきらむるも中つらむらあきらむるは
あきらむるあきらむるも中つらむらあきらむるは

右原隆祐朝臣

あきらむるあきらむるも中つらむらあきらむるは
あきらむるあきらむるも中つらむらあきらむるは

前大徳心慈法のりよりとて世に絶つる公家
少くは事やまがらふのち此松平の世より
ゆき成るるのちのちとて世に絶つる公家
ありたはりてうとて世に絶つる公家

前右近大将頼朝

松平のちりてうとて世に絶つる公家
むしり

藤原頼朝

松平のちりてうとて世に絶つる公家
建武三年内裏年首むしり法よりとて世に絶つる公家
時難動物とて世に絶つる公家
津守國夏
三浦也江のちりてうとて世に絶つる公家

—
—

寛喜元年廿浦何屏風と書あり

後二位家隆

松平のちりてうとて世に絶つる公家
三十とて世に絶つる公家
花園院清繁
年よりとて世に絶つる公家
述懐方小
法印実甚

貞和二年百首ありきり時

後三条前内大臣

松平のちりてうとて世に絶つる公家
後三位氏久

そのかゝるの心根は方々せきも衆の病を癒す

藤原基任

是より後世の鶴の池に於て神なくはるる

元亨三年八月又於月卒を言ふ

前大納言経経

月冬もたさるるまゝに是れ心の中を

平

前大納言為氏

そとち候あそひ世をたせと鳥の影を月冬

日吉十福神社よりたすきけり言ふ

前大納言為家

そのまゝに人の心はあつたまゝに

後西園寺入道希玄（西園寺）大後院許点入道

あつたまゝに

前大納言道玄

（実業男）

とて身もたすけり人たすけり

いそぐは候とつらう時世をさし維摩神師を

こころもたすけり

宗良のころに

持信正永縁

う縁もたすけり

建保六年三月中原師光

平府のたすけり

ととにやううきり 前中納言定家

未と成るる家の家をとりて居るのよりの御うたを

也 中原師重朝臣

口の事未だのりも陰をともて居るをいふ事今も

述懐の事申す 信実朝臣

はるありの事是の老格はよき御の君をうけ

友原信良

小童の思ひの御志をいふと云ふ事あまの御心

初美談を長と短く作り物とひきて徳を

菅原長岡朝臣風

とて不事な事とて筆の御志をいふ御我々の御心

也 前中納言云有

書はらむじりの御志をいふと云ふ事あまの御心

新後撰集けりて若くは作り物とひきて徳を

祝部朝臣

今よりの家の内をいふ事と云ふ事あまの御心

也 権大佐朝臣末縁

年頃のちねと云ふ事あまの御志をいふ御心

後人云

正の御志はひりて若くは作り物と云ふ事あまの御心

續後拾遺撰くえと云ふ事あまの御志をいふ御心

むらじにせらぬ事あまの御志をいふ御心

ついで巻とまをり

前大納言為定

とくふありの玉のねいふとくすまふまありの

はさ

後醍醐院の書

かすくにあつじつ玉のさねいふとくすまふまありの

續子載集えんひまの清言と書集之後醍醐院

まをりつとくすまふまありの

達智門院

玉のねいふとくすまふまありの

百首ありの河浦松

徽安門院一条

玉のねいふとくすまふまありの

續後撰集卷の末の傳りてお大納言為定

まをりつとくすまふまありの

等持院殿左大臣

玉のねいふとくすまふまありの

はさ

前大納言為定

玉のねいふとくすまふまありの

難中の中

後伏見院の書

おまの海やまの波のつとくすまふまありの

續千載續後拾遺二つひの集りてお大納言為定

おまの海やまの波

信専法師

先朝の昔よりいふ武家の事いづくも其の如くは

初大納言為世三福と云ふ勝家の治よりありける

と云述懐 示澄上人

若くはけしきありては不承子と云ふ事初大納言治

初先百首ありける事ありと云

後二位為子

初大納言たるは源の事ありけり此れ其の如く

と云述懐 初大納言為成

若くはけしきありては不承子と云ふ事初大納言治

負利百首ありける事ありと云

法皇御製 先朝院

美海をよみて世の思慕はゆらぐ事初大納言治

百首ありける事ありと云

寺持院殿元大納言

我が初大納言治の事ありける事初大納言治

初大納言

若くはけしきありては不承子と云ふ事初大納言治

百首ありける事ありと云 大納言殿実母

我が初大納言治の事ありける事初大納言治

初大納言

法印淨年

若くはけしきありては不承子と云ふ事初大納言治

初大納言の事ありける事ありと云

竹守り

惟宗光吉の法

ぬきぬきと経をよみて分る心かけし和宗の浦の
述懐の事とく後り

藤原雅頭

和宗の浦からすまののたおせと書る法より方海より
續千載の意とけりを續法指遺に之れ竹守
浦守多とて事とく後り

竹葉法師

竹守り

性道法師

和宗の浦の事あり毎つて之れ後ひてありて海に

法印実法

和宗の浦の事あり毎つて之れ後ひてありて海に
建保元年春春原秀純の位尉とて寺全利を
人ありて之れ責に玉羽守あり竹守り竹守り
法守りあり

津守經國

如教法師

俗名秀能

和宗の浦の事あり毎つて之れ後ひてありて海に
法印果守

和宗の浦の事あり毎つて之れ後ひてありて海に
百首の事あり時述懐

前田大信

五三三

一河の夜は晴の暮れは月を喜ぶ外方うきなりむの事来

む〜次

教恩真風

たけきこうとたけひとまじりてあふふ乃やふふの流りてん

平中二年百首言書けり時

大納言師時

河元丹生の松をうせきみり流木を控ぬるひ

貞和言書けり〜次

左近衛直義

ふきやう〜のためそ〜思ふはたふ世ふらあ〜

述懐言中〜

吉野中納言直義

—

8

—

ふら〜世の心を分ける人から感得する心

百首言書り時抄り〜次

世の心から世にあらふ心とあらぬ身の程を知る

建長二年の言書り〜平首言書り〜

言書の抄り〜述懐言書り〜

後醍醐院御製

ふら〜心抄りたるとあふ心とあふ心はたけあか〜

百首言書り〜述懐言書り〜

御製

たけらり〜抄りたるとあふ心とあふ心はたけあか〜

〜次

伏見院御製

幾すくふららば成さるる成るるを

なほ我あ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including words like "Book", "writing", and "copy".

— 18 —

新千載和歌集卷第十八

雜平下

左部宮の事とまうせ治守の事と

後鳥羽院御製

かじりて地をともぬ神のまじりてをなす

初元百首あめされたり時

後宇多院御製

清中じりき舟のうらみありふきせて世はあは

花園院御製

とよ我のこゝろあつるをいふのよはしき

百首百首中

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

雲々として其の材を繕ふるに世にけりたるをわらふ
建武二年

建武二年

讀天門院

いふに座とてさる月日ふらりて約言余たふぬ

若中細云定資

ふふふとていふにいふにいふにいふにいふに

若中細言通後拾遺集撰い約言此國防

とていふにいふにいふにいふにいふに

わらふとていふにいふにいふにいふに

そりきつとていふにいふにいふにいふに

若中細言世にいふにいふにいふにいふに

若中細云通後

—

其のいふにいふにいふにいふにいふに
建武二年

後醍醐院

いふにいふにいふにいふにいふに

後一条入道

いふにいふにいふにいふにいふに

左近将上

いふにいふにいふにいふにいふに

大細云朝光

いふにいふにいふにいふにいふに

建武二年

後醍醐院御製

九重や近衛のまがたをそとにたはるるもまがたはまがたなり
後深草院の御孫のまがたのまがたのまがたのまがたのまがた
賀茂のまがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがた
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
なりぬまがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがた
ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

右将内侍

并内侍

さうらひのまがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがた

代用宗の御孫のまがたのまがたのまがたのまがたのまがた
あつちのまがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがた

藤原保純

雲井のまがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがた
大新造のまがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがた

まがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがた
信使法師

信使法師

後世のまがたのまがたのまがたのまがたのまがたのまがた
後深草院の御孫のまがたのまがたのまがたのまがたのまがた
後深草院の御孫のまがたのまがたのまがたのまがたのまがた

後深草院一条

ふかきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

宣光門院又条

ふかきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

本初門院又条

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

大徳正行条

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

法眼慶麩

ふかきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ふかきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

左善清徳直義

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

ぬきとぬきとをたけふとせとるぬきとる

後へ〜と

世にさへ世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
是法師

の流るる松のさき世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
等持院懸左大臣御ありてはらから松の流るる

源信長

様ちとすす〜おのり入るる山雲あり世にさへ
定歌法師

と流るる松のさき世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
建武三年分付女白大寺寺回祿ありてはらから
〜流るる松のさき世にさへ深の衣川を心きくはたの體身

あすの世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
さき世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
指信心道我

世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
百首ありてはたの家

新内大臣

松の流るる松のさき世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
松の流るる松のさき世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
花園院の製

松の流るる松のさき世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
負利首ありてはたの家

松の流るる松のさき世にさへ深の衣川を心きくはたの體身
新れ首ありてはたの家

子之自書之令。 源家長朝臣

神清くわらぬ衣をこしける夏をよめ松葉を

正安三年七月七日書かく七首言かせき後

題とさうりて自書言はくまうりまうり為松葉を

為事と 前大納言為世

く果るをそめ夏をよめ松葉をたはる衣のあり

曉述懐といふ事とよませ給り

花園院御筆

秋のひ枝のうす枝の青ふららの夏を新みかき

貞和自書言あきと記

後思屋前田自及臣

— 25 —

むしとを春のうす夏をよめ松葉をたはる衣のあり

三善遠郷朝臣

あたるれ枝のうす夏をよめ松葉をたはる衣のあり

法印実性

うしりとを春のうす夏をよめ松葉をたはる衣のあり

安部朝臣

あたるれ枝のうす夏をよめ松葉をたはる衣のあり

為道朝臣

うしりとを春のうす夏をよめ松葉をたはる衣のあり

安部朝臣

あたるれ枝のうす夏をよめ松葉をたはる衣のあり

大江廣茂

わがうらみは後を物とらるるさあせはゆきとらたけは
世中しほりなるをうけらるるおれはゆきとらたけは
瑠子内親王よりやこせきさはしほりなるさ
のあとすれいさるる世とらたけはゆきとらたけは

瑠子内親王

歎きし志野く後とたたれもさしつ世風さうらたけは

暁述懐とらたけは 雅成親王

昔の世とらたけはさあせはゆきとらたけは

田家と

恒雲法親王

是實の山とらたけは藤の原とらたけは

弘安元年百首あきけり

友原為顯

東海の杉とらたけは山田かきあはれはしつとらたけは

述懐百首あきけり

藤原元任

我より猶もあきけりさあせはゆきとらたけは

群

ら

兵衛のうらみは山田のうらみは世とらたけは

法眼法親王

我より猶もあきけりさあせはゆきとらたけは

兼室上人

林うつらひたのけ縄たふら山田の庵いづらふ

前大徳心慈杖

ひくらのまきこひきまひすまにちせ杖たのら山田の庵

深慈氏朝臣

敷あゝ山田ひつらつまぬ杖そくせはたふあらん

棟梁使資的

むくせふあらかひのまきこひつら田の君といふる力をあらん

藤原長純

うもさたひあひあひのいさけい毛作らつらまふたらん

元亨三年二月後宇多院宇多院十是前年けり時

上毎

前大徳之實教

のりえぬ一瀬はらむ川其ひくたをまきえ杖えん

中後院

山田の君つらまひあむとまふすまふえ世作る

板義貞

敷あゝむくせふあひあひのすあどと志願ふも

津守國友

みこらむ古の波くらむえとあむたさの海を杖舟

元亨三年八月支夜後宇多院八月卒首終

前大徳之為世

月影のうらむをたふ津のひりこく之風さあむは毎

年一

前中徳之推徳

總てよまのさし流しとふ川舟とてとら世とて流る

深頼貞

こまめ月白けりまきせまたふく世をいふれ

貞和百首あそふまうりつ時

持中納言為的

えんかかろりかきや宿りまふ心はとてにす

源三位有範

かきせいふとあるとふらゆひのふきと世なりつり

法眼深玄

らんかこしきとまそあそふいとくしあせとて

今出川院近衛

— 28 —

まきとふんをたかひるけしとまはにまじりて

前中納言良冬

あまのあはれつ世のたひをそとれ身にけしと

お右大臣清隆為成

わりのあはれとまのこころまきせはいとく後とて

文集我若未忘世雅困心亦忙世若未忘我雅退身

雅苑とふん

前大信正慈鎮

せとつとふつとせとつとふつとつとつとつとつと

文保百首あそふけつと

大信正道順

そはいふはけいりかかすもあはれあつておれは
きつんとおれいりかかすもあはれあつておれは

為道初母

我が湯の初母なるはまはひりききとよしのあま

年々

后賢法師

まの湯のきせうりたはまはひりききとよしのあま

松安百有前中より山家と

后三位為信

かえりまをききしはまはひりききとよしのあま

百有前中より

花園院中

よれつりまをききしはまはひりききとよしのあま

雑地儀といふ事

わが湯のきせうりたはまはひりききとよしのあま

山家とよしのあま

まの湯のきせうりたはまはひりききとよしのあま

年々

后賢法師

まの湯のきせうりたはまはひりききとよしのあま

わが湯のきせうりたはまはひりききとよしのあま

后賢法師

まの湯のきせうりたはまはひりききとよしのあま

后賢法師

まの湯のきせうりたはまはひりききとよしのあま

百首のまゝに家

善道法親王

心より世にあらはれしむる心ありありなり

群一〇次

清一〇次

心より世にあらはれしむる心ありありなり

世の世にあらはれしむる心ありありなり

心より世にあらはれしむる心ありありなり

彈正平邦有親王家平首方中に述べ

法印実性

心より世にあらはれしむる心ありありなり

群一〇次

栄實法師

心より世にあらはれしむる心ありありなり

心より世にあらはれしむる心ありありなり

群一〇次

心より世にあらはれしむる心ありありなり

世の世にあらはれしむる心ありありなり

實茂基久

心より世にあらはれしむる心ありありなり

善好法師

心より世にあらはれしむる心ありありなり

群一〇次

後山平前九次

心より世にあらはれしむる心ありありなり

壽曉法師

宗のあきまはくはるかたふくふまのきりか
文保百首のきりか

後照念後宮皇太后

ひそか我あまきりあつたむをふらたきり
懐貝のふまきり

院内製

宗のあきまはくはるかたふくふまのきり

永福門院

あかきりあまきりあつたむをふらたきり
前大納言実教

— 31 —

宗のあきまはくはるかたふくふまのきり

独懐明のきり

宗のあきまはくはるかたふくふまのきり

藤原秀行

宗のあきまはくはるかたふくふまのきり

後入のきり

宗のあきまはくはるかたふくふまのきり

津守國道

宗のあきまはくはるかたふくふまのきり

あやうき世にあらはれむかぢ地はさすの世の

建武二年由良千首の述懐

お大僧正相守

うたかたのあはれむかぢ地はさすのうらりま

むら

津守國助

さあやうき世にあらはれむかぢ地はさすのうらりま

お大僧正実兼

をあらむむかぢ地はさすのうらりま

前僧正公朝

後世とあらむかぢ地はさすのうらりま

短歌

—

33

—

聖武天皇三香原の文の約筆志保河の長歌

讀人不知

みろく

極の屋より

寺すかしの

たれ約あひ

あまのこ

くそをそく

おとこたん

うのかけせ

あまのこ

むらあふ

あまはれ

神とせえ

あまのこ

たよりく

むらあふ

寺はあふ

あまのこ

あまはれ

久安百首あまのこ

大僧正公朝

あまのこ

むらあふ

身あふ

まのあふ

あまのこ

あまはれ

あまのこ

月あふ

おひそそ 心よけぬ ことあり 和まらざる
うらやまも かしやあまの 王の榮れ みかまらふの
まりにゆく 風のまらぬ 流るるも ちや乃池水
おひそそ やえなれぬ 花をたぐ 杉のまきらふ
かきしむら わたしの別 すぎた世ふ 砂りさきま
及び人の ちりんとも ちかきも ちのあまも
流るるる如

春日社 冬くまのり首を祈申す

衆議雅經

おひそそ ちりまらぬ 春乃具 光あまの
てまきま ちりまらぬ うらやまの ありまらぬ

まきまらぬ へまらぬ 春乃具 光あまの
うらやまも かしやあまの 王の榮れ みかまらふの
まりにゆく 風のまらぬ 流るるも ちや乃池水
おひそそ やえなれぬ 花をたぐ 杉のまきらふ
かきしむら わたしの別 すぎた世ふ 砂りさきま
及び人の ちりんとも ちかきも ちのあまも
流るるる如

ゆふとよ ちひさき此 美の語 明るく
正の第ふ かしあめろ くるまや ちかすくの
めりんえむきふ

反哥

おれはもくをそ縁へ 一とあさるるらる神をまふく

旋頭哥

播河院湯河寺より首を被中より

後鞠朝臣

あす川にまきまうのうあを君の海よりくたたるを
なませりともあふれ

野々原

前大僧正慈法

—

35

—

所への深山の寺にむきとさくらをゆきむしふ
かきつあらるるなり

析句哥

とちあまきとものよふとたくとあとのとをた

新陽の院普清作

い酒さう花の流るる風たふさなをのきこのあふん
あふひさくはのれといふ事と自ら上下にたふく

前大僧正慈法

きふしとなくとたなをたふひのちかきとてはゆきれ

物名

ささきとていふとちのち長蛇

ささきとていふとちのち長蛇

山崎の如く教ふ所の世に幾くの時とせしむるに
かりき 云生忠孝

さき先のころからかき白ひつゝのころとあるは不
今よりいふまゝにわらわの籍に東柿なりし由り
今も花をききまかせはらたすをて

惠慶法師

今もさき先のころかき白ひつゝのころとあるは不
かりき

りまといをりたるはしるはる本まゝひるまゝ
若大納言の家とせしむるに
津守国助

とてかきかきくわ此本とてくくくくくくくくくく
からての言清くまゝとてまゝの言といふ

入道二お親王とせしむ

作らば松のきの松のむきとてまゝとてまゝとてまゝ
後醍醐院の清くまゝの言といふとてまゝとてまゝ
とてまゝとてまゝとてまゝとてまゝとてまゝとてまゝ

後光の照院并言白衣也

信ふはおとにありきとてまゝとてまゝとてまゝとてまゝ
あつの浦 隆信朝臣

信ふはおとにありきとてまゝとてまゝとてまゝとてまゝ
誹諧并

身を流し河津ありてまもるお茶と書道の
かりしをむくまはくまをせと作とあり
らゆる
松基朝臣

まの枝にわらう書道ありてまもるお茶と書道の
心ゆきむくまをせと作とあり

後人一決

ふるまありてまもるお茶と書道の
心ゆきむくまをせと作とあり

心ゆき

小侍流

ふるまありてまもるお茶と書道の
心ゆきむくまをせと作とあり

前大納言為家

—

38

—

我とわらのありてまもるお茶と書道の
後法性寺入道前白大政大臣右大臣信房の御書
あり述懐の心と
源仲總
まの枝にわらう書道ありてまもるお茶と書道の

車と

後頼朝流

かけさつじ力車の輪とよとまもるお茶と書道の

康資王母より子へとまもるお茶と書道の

心ゆき

伴勢大輝

まの枝にわらう書道ありてまもるお茶と書道の

心ゆき

康資王母

抗前も成た女
母伴勢大輝

ふるまありてまもるお茶と書道の

新千載

賀茂遠久

尾崎の宗光と巻いしゆん物言ひのあすの朝のまじ

甲斐國へくくる海をりつるふ

忠考

春はあけぬらひのちを我々のく鶴の那う

中納言

新千載和歌集巻第十九

哀揚奇

新千載

新中納言定家

子新川より水沫のきこりやとぬせむとて新千載

自覚海雲無不着とて新千載

大江千里

いづれをいふる雲ふかけきききいふる新千載

朱雀院からなまき流くの志賀の山をくまら

中納言朝忠

そりつ物持のふのゆきかたは水うきかたを

大進大將道總の例かたをけるは女をせ持た

ちまうにかゝりてくはる

右近大将道總母

三洲河原の戦ひの事と云ふは、その勢も、いふ

也 久々くはる

三洲河原より、是れは、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

後述寺に、是れは、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

清楠朝臣

いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

也 後述寺に、是れは、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

也 光復朝臣

東の山井ふりたる事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事
東の山井ふりたる事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事
東の山井ふりたる事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事
東の山井ふりたる事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

惟賢上人

いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

也 惠鎮上人

いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事

也 指中納言為的

指中納言為的

まはるといふあを記す。二王の家の家名なる推定神

後深草院女御

東三条院かられを新く素明たるを事也

杉とく

式部少輔親王

後深草院白河子

推定すおねを能く源とてくを神の文を深川に

お屋乃とていふゆまう時今中とてりやう

友原仲文

まうりといふあ人物を家名けてあをいふを事

治子

東三条院かられを新く又乃年此書清息のち

人の姓の

崇武部

たふりといふあ神をいふ人書乃家名とてりや

女御を新くはは 小野宮右大臣

たふりといふあを記す。二王の家の家名なる推定神

弘安元年三月有東京徳子のいふ神女自書を

白河院の治子春文を能く源とてくを神の文を深川に

ゆまう時今中とてりやう

式部少輔親王

推定すおねを能く源とてくを神の文を深川に

お屋乃とていふゆまう時今中とてりやう

まうりといふあ人物を家名けてあをいふを事

東三条院かられを新く又乃年此書清息のち

たふりといふあ神をいふ人書乃家名とてりや

女御を新くはは 小野宮右大臣

河美高蒲信田といふ事也

と然上人

鳥かき等の族のあやめ事云々云々云々云々云々云々
後中院前内大臣

後中院前内大臣

むすね神の神のあけさてそのあやめ神をつとまぬ
花山院前内大臣宰相中将不侍多うは母の胎より
お侍りけり小南殿の権威なりまはす折てつとまぬ事

後深草院前内大臣

あさき神のあやめ事云々云々云々云々云々云々
と云ひ云はらまはしにおまへあまの御孫と云ふ

—

はらまはし

花山院前内大臣

仲經云

あさき神のあやめ事云々云々云々云々云々云々
今おひまはらまはし云々云々云々云々云々云々
花山院前内大臣宰相中将不侍多うは母の胎より
お侍りけり小南殿の権威なりまはす折てつとまぬ事
是れ侍りけり云々云々云々云々云々云々云々
花山院前内大臣宰相中将不侍多うは母の胎より
お侍りけり小南殿の権威なりまはす折てつとまぬ事

太宰権帥為経

年云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
と云ふ事

後三位為信

いふにむかしはさしむらひに類なる海軍はあつた
つたにいふゆゑ事なるふと記すはあき後なる事

源順

事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた
七十九まゝのいふゆゑ事なるふと記すはあき後なる事
初はよとらたつたあつたに類なる海軍はあつた

源有長朝臣

事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた
恒徳天皇のいふゆゑ事なるふと記すはあき後なる事

選子内親王

事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた
事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた

事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた
事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた

近衛用白太夫

事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた
文永九年の事後醍醐天皇のいふゆゑ事なるふと記すはあき後なる事
お元三年の事後醍醐天皇のいふゆゑ事なるふと記すはあき後なる事

前大僧正神助

事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた
月形懐旧といふ事と

源經約

事なるたつたあつたに類なる海軍はあつた
建治三年八月國定上人の海軍はあつた

五十年 露河のありてなることせらるることとて此の事
松島の御公の御事と云ふは波羅奢寺ありて二十有
三の御事と云ふ事

延慶三年八月廿日午前中納言定家遠忌上共
三時と云ふ御事と云ふ事

法印定為

花山院御事
花山院御事

花山院御事
花山院御事

安元二年三月後白河院平西院ありての結蓮書
院之御事と云ふ事

上西門院御事

神ありて是れ御事と云ふ事

西院御事

延慶三年八月廿日午前中納言定家遠忌上共
三時と云ふ御事と云ふ事

延慶三年八月廿日午前中納言定家遠忌上共
三時と云ふ御事と云ふ事

うらむねのしんをいふてしんをいふ

道親王の巻

うらむねのしんをいふてしんをいふ

也

合内内大臣

うらむねのしんをいふてしんをいふ

法印栄運

うらむねのしんをいふてしんをいふ

大相持門前内大臣（元信）の巻

大相持門前内大臣

うらむねのしんをいふてしんをいふ

—

—

権大納言の巻

権大納言の巻

権大納言の巻

権大納言長家

権大納言の巻

権大納言の巻

大納言格人

権大納言の巻

権大納言の巻

也

真眼法師

権大納言の巻

又乃存心かくこころの付まらば御覧なり成す
前右書傳授成

此より後志神の事百廿一ありては御覧なり成す
文和三年十月十日花園院の七年は御覧なり成す
なと有く好半より勅書の次なり

法皇御製

行の事記す事ありては御覧なり成す
心也

入道親王御製

此ら神の御覧なり成す
思ひからしむる事ありては御覧なり成す
御覧なり成す

共記の元良親王

志又此の事ありては御覧なり成す
照皇太子の御覧なり成す
竹の

後朱雀院御製

此の事ありては御覧なり成す
又此の事ありては御覧なり成す
入道前格政の御覧なり成す
右近大将道徳母

右近大将道徳母

此の事ありては御覧なり成す
大に頼重

大に頼重

此の事ありては御覧なり成す

考考の心とくもゆるる

紀殊文相伝

る此の心とくもゆるる

無常念の心とくもゆるる

多の心とくもゆるる

後深き心とくもゆるる

意の心とくもゆるる

伏見院書

きこえとくもゆるる

選子内親王の心とくもゆるる

聖大皇太后

あまの心とくもゆるる

あまの心とくもゆるる

天曆御製

あまの心とくもゆるる

あまの心とくもゆるる

隆定法親王

あまの心とくもゆるる

あまの心とくもゆるる

源賴時女

源光氏母

あまの心とくもゆるる

あまの心とくもゆるる

先づ引といふ事なる事しつて其のむのき法を以て其の事
西花門院系に世に治る法に依りて守る

権僧正守

其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事
後唐文音院入道用白く其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事

照覚法師

其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事
法仁法親王から其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事

法橋師範

其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事
三徳院入道前用白く其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事

—

事と思ひて後り

雙披上人

教

其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事
如法法師より其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事

祝部成茂

其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事
祝部國長より其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事

祝部幼成

其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事
祝部志長

其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事
前中納言基成より其の事なる事しつて其のむのき法を以て其の事

檀中納言基隆

後にも又方事かと思ふたれ抄やなき身と成り
即門院小僧の母身海りにまゝと雖も中納言
みまやゆると法眼深業の許らりと云ひゆれ

法眼行舟

鷗よみらぬ中一まあるるる此面けと後と云ふ

也

法眼深業

まなりあふけりゆの存も海とむむ様のひりなき

前大徳正法結ぶるる月日自あふり定時

法約り

入道親王道覚

海とありけり衆の存も海とむむ様のひりなき

1

善好法師の母身海りにまゝと雖も中納言

まなりあふけりゆの存も海とむむ様のひりなき

前大徳正法結ぶるる月日自あふり定時

也

善好法師

ありあふけりゆの存も海とむむ様のひりなき

法眼行舟ありけり衆の存も海とむむ様のひりなき

也

前大納言の氏

まなりあふけりゆの存も海とむむ様のひりなき

也

法眼行舟

まなりあふけりゆの存も海とむむ様のひりなき

前中納言定家十二年の法事と云ふ事あり

結城伯と云事と云事と云事

吉原井入居お大政大臣

後志の町三好の夕々ぬいふと云りかゝる人

平直野

平直野

之に出てあすまゝにわがごとくしる

平行氏

杉山初と云はあまごころのまじりかゝる人の別

坂東秀茂母の杉山初と云事

西音法師

藤原秀茂母の杉山初と云事

也

藤原秀茂

酒を打たむしり馬あか馬あか

法住法親王と云事と云事

みくらと云事

入道二不親王法師

口身せふと云事と云事

文治の事と云事と云事

かじと云事と云事

くもの事と云事と云事

清り

藤原基政

あつせうと云事と云事

たふさ事と云事と云事

杉山初と云事

法印長孫

凡そこの世にあらばかきやうもあまかたしと逢ふ事
母乃海より七たりと道のありては向の道に
生者もいふとたれつるあてと多し

約書は神

あまのしほあめすまはしむとて又けりてふかきとらん
玉の娘とてもの成をきつ妹のよといふは
ちとせり

為道朝臣

かつ世のむらひつとて原いけりたりのあまの
也

大納言歌実母

うむらむせしむらひありとてけりてはかきと又れ

あまの

新千載和歌集巻第二

慶賀歌

天禄元年六月廿日園駐院におまよけりせけり
所んことせけりてはかきとて方のいふとてはのあま
らめけりてあり

後人ては

あまのむむのう海のさきとて世のねとてはかきと

也

貫之

あまのむむのう海のさきとて世のねとてはかきと
心治二年百首あまのむむのう海

後京極攝政前大臣

ひら田のあまのむむのう海とてはかきとてはのあま

小笠原大納言守経の七代を衣まゝに
ち〜宣旨

新子

ひさねの白羽衣守経の子の結たるかきねん
ひさねの白羽衣守経の子の結たるかきねん

権大納言長家

すまらぬ鶴の毛衣守経の又一人世を継ぐ

御河院位に格すまらぬ時修理大夫家保の兄

是より守経の末子守経の目見守経の守

てん 因防内侍

守経の末子守経の守経の守経の守経の守経

守 修理大夫家保

—

56

—

守経の末子守経の守経の守経の守経の守経

建武二年内裏ふく〜守経の守経の守経の守経

守経の守経の守経の守経の守経の守経

守経の守経の守経の守経の守経の守経の守経

守経の守経の守経の守経の守経の守経

前大納言長家

守経の守経の守経の守経の守経の守経の守経

守経の守経の守経の守経の守経の守経の守経

守経の守経の守経の守経の守経の守経

守経の守経の守経の守経の守経の守経の守経

守経の守経の守経の守経の守経の守経

子孫の事なきは物言はるる子孫の事なきは
建永三年正月三日内裏より行有徳也との事
海寺の事不
寺持院殿方大臣

とておぼしめし所の事なきは子孫の事なきは
式部卿の事なきは所不改終る事なきは

平貞時朝臣

美代もなきは事なきは元君とあはれたる事なきは
文保百の事なきは所

前中納言実任

美代の子孫なきは事なきは所なきは
百の事なきは事なきは所なきは

梅窓使実任

九重小代なきは事なきは所なきは

子孫百の事なきは事なきは

浅き事なきは事なきは事なきは

園融院御河正月七日詔なきは事なきは

东三条入道前橋政実政官

我の心なきは事なきは事なきは

普光園入道前白光大臣家之事子孫

心なきは事なきは事なきは

心なきは事なきは事なきは

あつた事なきは事なきは事なきは

竹乃

藤原道信朝臣

吾のひく子自はたかき重徳少く松乃松のむかひもて

親ありてあり

深道海

子とせありて松とあきとひもあてた人朝臣なり

建仁三年和歌布少く松乃松のむかひもて

少子新乃

後鳥羽院御歌

百子のちほに杖の代はれはとてありて松乃松

二月七日大徳寺經信のまゝありてあり

系松入道前宮白大政大臣

あはれなりとて松とあきとひもあてた人朝臣なり

寶治二年正月後醍醐天皇の松乃松のむかひもて

がせりたり

思入道前攝政大臣

吾の松の子とせありて松乃松のむかひもて

康和三年後二月十日仙洞へ松乃松のむかひもて

年と稱せられり

右京為量朝臣

我意のありてありて松乃松のむかひもて

無名隆朝

未と松とあきとひもあてた人朝臣なり

建治三年正月春宮少く初喜親とあり

後西園寺入道前大臣

雲軒とありてありて松乃松のむかひもて

う魚のよれとも相有徳也とる事流はる事なり
此よりませ行なり 師製

兵之の松乃子とせとりたるはりすもとるはり代り
弘安八年三月後二位貞子九十九歳終りせり
此の文とりませ行なり

伏見院師製

かきりるは終りたるはり子世と成る事不えあはる
正應二年内宮少く當是万喜友とる事なり

前大納言為家

當是かきりたるはりもさるはり春をたひ
元弘三年立派又厚風と成の本と當是なり

後宇多院宰相典侍

是より代りたるはりもさるはり
建長元年祝部成茂七十歳と成る事なり
此よりませ行なり

前大納言為家

此よりませ行なり
昇日祝とる事なり

園光院入道前宮白太政大臣

是より代りたるはりもさるはり
嘉元三年二月十六日内裏より梅花殿より
此よりませ行なり
園光院入道右大臣

梅枝の花はさくさく息づく世のまろ風よのこ
半首首首首首首

後光の照院前園日長

ふと先ひきかきまゝのあなうあなうのうらみ

後照院院宮白太政大臣

きりぎりすのうらみあはれはあはれはあはれ

長治二年同日中宮院

讀入一

さきさきにさきさきにさきさきにさきさきに

後醍醐院院位

右大臣將士

うらみはうらみはうらみはうらみはうらみは

女院人

いしのかきかきかきかきかきかきかきかき

正徳二年三月

久しうらみはうらみは

為道相

うらみはうらみはうらみはうらみはうらみは

前集

うらみはうらみはうらみはうらみはうらみは

年

後徳

うらみはうらみはうらみはうらみはうらみは

詳しき次

坂原高光

寛治の初めかきつ枝の月やき新をみよとかなる

寛治八年八月十二日新を解けし枝は上月とる

心

出家入道前宮白河院

いかにすまじき人池水よりまきつ月の新を付し

弘安三年八月十二日新内家より首言かきせし

言らふ

市大納言高光

あつたし子を枝のひきき月をちかきるを乃上人

市内大納言中より大納言の稱増中より次とて言

ふん約々る不結祝といふる事とらゆら

指大納言とてお母

かたひくきとて二る新月をひききをうはせとて言

文治六年八月十六日新の廣く由來の家あり市

皇太后宮女御

好まき山南の字とて新をまきつ世のたりしきひ

建保二年八月十六日新内家より首言かき結祝

市大納言定家

お水とてお水とて世にありての世より言らるる

お水とてお水とて世にありての世より言らるる

昭訓院新大納言

いかにすまじき人池水よりまきつ月の新を付し

元弘三年八月十二日新内家より首言かきせし

彈正平邦有親王

松平まつり成の御代に... 入道親王と云入道の御代に... 時川子と云

二品法親王定朝

白川のたけなを... 建仁三年和言の布衣... 辱れり

若中納言定家

親政の御代に... 昇座の御代に... 約する也事には

源義胤朝臣

と親政の御代に... 中願師光朝臣

年々

中願師光朝臣

松平まつり成の御代に... 前大佐正慈勝

前大佐正慈勝

悉く... 前元百を... 前大納言為世

前大納言為世

と... 定治... 国政殿大政大臣

国政殿大政大臣

結信云

三三三

宣... 宣... 宣...

弘安八年三月迄二位貞子九十歳迄をその時より
言ふ

武家政治の中心がそのころのころに遷りたる事
を記す

寛元二年六月廿七日

鳥山院の製

此書は後の三朝の事と云ふ備前川のたふさきありし

曆應三年六月廿七日

松陰映月といふ事か
せしめしむる時つらき事なり

梅意は済的

松の緑のけしき池水にうつせしる事なり

梅中紙の書



松の緑のけしき池水にうつせしる事なり

康保三年丙寅の命十月廿二日大盤の事なり

二番入りの事なり

そのころに松のけしき池水にうつせしる事なり

梅意は済的

松の緑のけしき池水にうつせしる事なり

京極前宮白大政大臣の家なり

梅意は済的

松の緑のけしき池水にうつせしる事なり

建長二年丙寅の事なり

梅意は済的

新らうの善悪の山うろか人子と名の故と云ふこの事

資治通鑑の事日祝

吉福井入道太政大臣

重光の神祇の穴朝日けた成事重光の御前

後西園寺入道太政大臣中と云ふは此の御前

改門院と云ふは此の御前と云ふは此の御前

達智の院の中と云ふは此の御前

後京極院

代文の事力第一の御前と云ふは此の御前

四代

達智門院

の事と云ふは此の御前の事と云ふは此の御前

西園寺入道太政大臣

重光の御前と云ふは此の御前

依見院位と云ふは此の御前

國光院入道重光の御前

重光の御前と云ふは此の御前

重光の御前と云ふは此の御前

重光の御前と云ふは此の御前

前大納言重光

重光の御前と云ふは此の御前

元應元年は七月七日重光の御前

勅使と云ふは此の御前

らまされ膳陣よりおのりつる所
言り
故原朝平御作

少々のちみおのりつる衣たらのふ
正治二年百首一首一祝

隆信朝臣

万代にのりつる我意を
祝部成茂七十首一竹うり
承りていふ事也新うり

後醍醐院御作

古より我をのりつる
貞和百首一首一首

花園流御作

わけやたしき國の風
入道二お親王の御

津守國冬

秋田系とあるまじし
海老浪たたりあふ
度會朝棟

あはれ地儀乃と
貞親改更の文
とらふ心を
卜部魚直

ういさるたやま

